

修監・馬生島有・村藤崎島 232-B88

# 船の金

號月十

国立国会  
8.3.20



ニッポ  
ンホ  
ン  
鷺印  
レコード



大正十年九月新譜御案内

曲種	曲目	演奏者
無	三國ぶし	三因港 丸岡まゆ子
小	唄 づばら	神戸 高八、歌山 共立 榎 玉三郎
萬	歳 春尼港 五段返し	神戸 砂川 繪丸
俚	安 來 泰 雨	安 來 岸本 花子
萬	歳 浪花節入數へ唄	大阪 荒川 千成
常	盤 津 積戀雪 關扉 (終り三枚)	東京 常盤 津松尾 太夫
マンドリン	ボヤカバンゴール	東京 横須 葉三
ピアノ伴奏	カニエラワオウルツ	東京 二宮 檢照 叙
流行唄	鴨 教 江 節	神戸 市川 鏡 保
書生節	琵琶 歌	大阪 秋山 靜代
新體詩吟	會 我 兄 弟	東京 會 津 正
浪花節	鹽 原 多 助	大阪 京山 福 造

青と別れの場  
株式會社 日本蓄音器商會  
東京 東京橋 銀座一丁目  
大阪 東區南久寶寺町四丁目

西條八十先生著

四六判上製箱入、最善本、全一冊定價一圓八十錢、送料十二錢

新 童話集

不思議な窓

模範的兒童用最良書として父兄各位に推薦す

△皆さんがお待ち兼ねの西條先生の童話集がいよいよ發賣されました。是非お読み下さいこれまで他の書とは格段の相違があります。

第五版

童謡集

十五夜お月さん

野口雨情先生著  
本居長世先生曲  
岡本歸一先生畫

四六判箱入、表紙石版五度刷、作曲、挿畫入、類美本、全一冊定價金一圓二十錢、送料金八錢

編一	西條八十先生著	抒情小曲	靜かなる眉	第十版	袖珍箱入天金頗美本全一冊	實價金九十錢	送料五錢
編二	水谷勝先生著	抒情小詩	寶石の夢	八版	袖珍箱入天金頗美本全一冊	實價金九十錢	送料五錢
編三	野口雨情先生著	民謡詩集	別後	忽ち五版	袖珍箱入金線頗美本全一冊	實價金九十錢	送料五錢
編四	竹久夢二先生著	詩集	青い小徑	新版	袖珍箱入天金頗美本全一冊	實價金九十錢	送料五錢

尙文堂發行

東京 市 神田區 南區 保町 六十番  
大阪 市 東區 九三番 四番

(一の付前)金

誌雜究研作創の譜樂謠童入繪

# 童

# 謠

## 創刊號内容 (九月中旬行)

問	顧
順はろい	野口雨情先生
本三西近山	田耕作先生
居木條衛	秀磨先生
長露八十	先生
世風先生	先生
先生	先生

發行所

會協謠童本日

地番六卅町下宮區川石小京東  
番一二四五川石小話電

錢二十九圓四分年一 (稅共) 錢六十四圓二金分年半 (一郵錢) 錢十四金卅一價定

店書本岸元賣發

二一ノ一町田區芝京東  
番八九五四五京東替振

濱田廣介著

四六版三百三十頁

定價金二圓

# すひろ 椋鳥の夢

装幀 幀川上四郎畫伯

▽口繪挿繪數葉入△

童話作家の花形ひろすけ先生の童話集が出来ました。お話はみな上品な可愛らしいものばかり。花のやうに美しい立派な本でございます。何卒御読み下さいませ。

發行所

東京市外池袋八三二番  
振替東京一貳一〇一

新生社

全國有名なる大書店にあり

内容 (二十二編)

- 椋鳥の夢
- 花びらの旅
- かほり星
- 花の夜の花
- ほるほる鳥
- 青い
- 雨と鳥
- お日さまと
- 呼子鳥
- お月様と鯉の子
- 晴子の小太郎
- ある夜のキユーピー
- 一つの願ひ
- あなごの母さん
- 燕と野鼠の子
- 燕と野鼠の子と星
- 子猫の手紙
- お米の
- 黄金の箱
- お金の箱
- 三日目の推の實
- エダヤの

(三の付前)金

(二の付前)金

たしま出よいよ

天の兼待お  
地の自然出々  
巻の然しま  
大の然しま  
迎の然しま  
迎の然しま

# 少年科學小話

廣田花崖先生著 (天地の卷) (自然の卷)

四六版美本  
定價壹圓三十錢  
送料各金八錢

この本は、今の學問を土臺にし、それから推し量つて斯うもあつたらうといふ千萬年前の生物の始めて發生した時の事から、斯うもあらうといふ千萬年後の開け切つた世の事まで思切つて想像を廻らして巧みに書きつくされた小話です。あつさりした面白い文に引付けられて讀んで行くうちに、次第に科學の興味を感じ、自づと發明創造の芽生えを養ふことが出來ます。未來の世界的大發明家大發見家は屹度この本を讀んだ人の中から出るに違ありません。

東京女子高等師範學校教諭 堀 七藏 先生 著

十 少年科學叢話 定價金一圓七錢 送料八錢

五 理科なぜですか 定價金一圓 送料八錢

三 岡本瓊二先生著 談 定價金一圓 送料八錢

課外理科叢話 定價金一圓 送料八錢

三 理科私は水の一滴 定價金一圓 送料八錢

三 趣味の實のある話 定價金一圓 送料八錢

生田春月氏編 十三版 菊半六號 二百餘頁 裝幀極美 (後に八百頁以上の内容を有す)

# 日本民謡集

日本のあらゆる民謡中特に藝術的價值高きものを厳選網羅せる一大集成である日本の民謡を知らんとせば本書一冊にて充分の満足を得らるゝ。

定價一圓五十錢  
送料八錢

一戸理學博士序 ■ 渡邊農學士著 ■ 二十三版

# 林檎の暮落つる音

此書には六十余篇の面白い科學の話が満載してある、どれを讀んでも取りぐに面白く不知不識の間に子供の頭腦へ科學の智識を植ゑ込むことが出来る、最も新時代に適應した子供の讀みものである (文部省認定)

定價壹圓三十錢  
送料八錢

東京神樂町 越山堂 電話九段一 九三二 五九二 四二

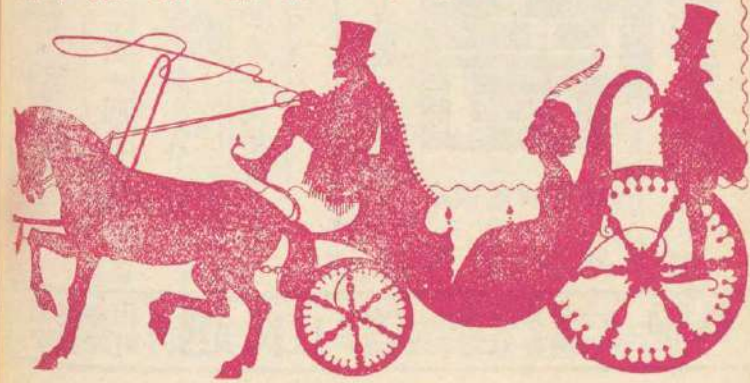
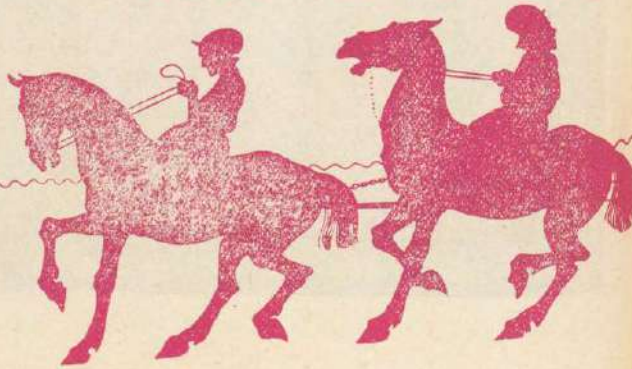
敬文館 發行所 東京神樂町 小川三三三 四六三

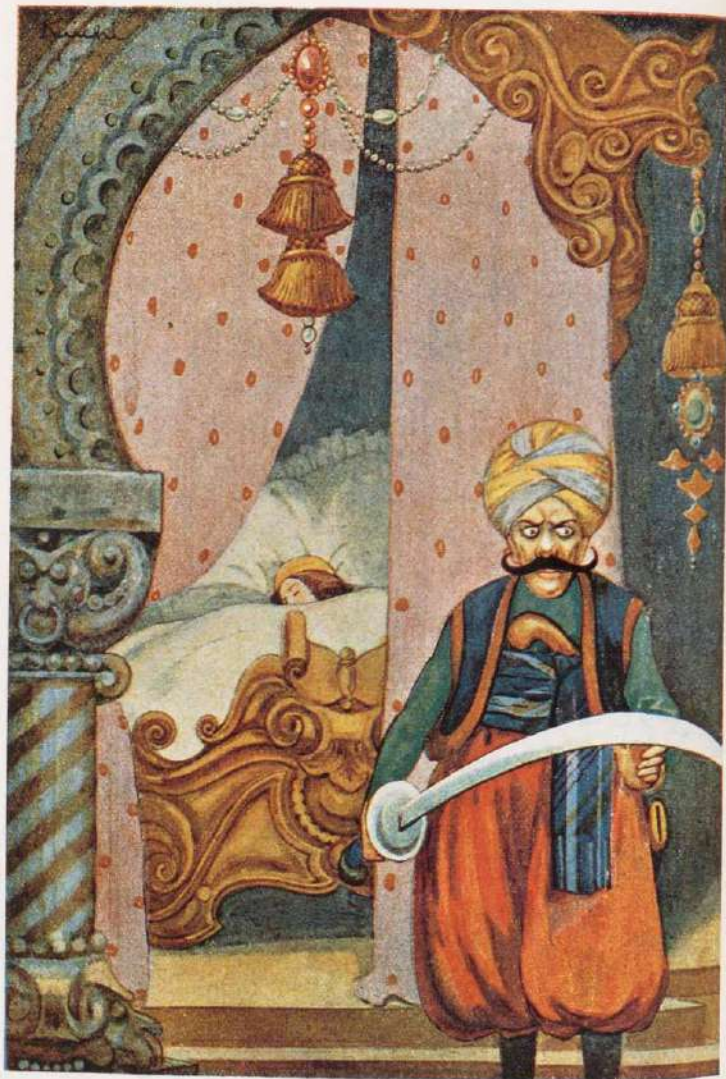
目次

月の使 <small>(表紙・原色版)</small> 今夜も出て来たら <small>(口繪・三色版)</small>	岡本歸一
乙姫さん <small>(曲譜・童話)</small>	野口雨情
鏡國めぐり <small>(長篇童話)</small>	西條八十
お菓子 <small>(繪はなし)</small>	岡本歸一
罪なき娘を探ねに <small>(童話)</small>	馬場孤蝶
印度イソツブ物語 <small>(寓話)</small>	楠山正雄
隣の金 <small>(童話)</small>	沖野岩三郎
金を掘る話 <small>(童話)</small>	内藤豊雄
寝時とつとぬけ出して <small>(童話)</small>	藤本俊子
露の願 <small>(佳作童話)</small>	三宅房子
無花果の御殿 <small>(童話)</small>	三宅房子

泡のお姫様 <small>(昔聞傳説)</small>	船橋重一
王子の夢 <small>(童話)</small>	藤澤衛彦
海 <small>(童話)</small>	水谷勝
籠 <small>(童話)</small>	吾達崎龍一
母を尋ねて三千里 <small>(名作童話)</small>	吾達崎龍一
日の御子 <small>(日本神話)</small>	三宅房子
蟻 <small>(童話)</small>	楠山正雄
帆立 <small>(童話)</small>	若山牧水
友の手 <small>(貝童話)</small>	若山牧水
山のいち <small>(紙自由書)</small>	若山本
からすの子 <small>(幼年詩)</small>	若山本
通 <small>(信)</small>	若山本

後の山六爺さん(附録)..... 沖野岩三郎



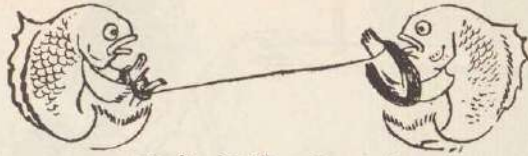


今夜も出て来たら

岡本歸一畫

王子の寝る時刻となりました。家來はいかめしく身ごしらへをして、王子の室の隅に立ちました。手には劍を抜き放つてしつかり握つてゐました。王子はこの家來の姿を見て、頼もしい氣持がしました。そして今夜からはもう大丈夫だと思ひながら、ふつくらした羽根蒲團の中に身を埋めました。

(「王子の夢」の四十八頁を御覽なさい)



# 乙姫さん

本居長世作曲



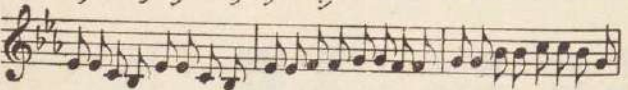
1 1 9 5 1 1 6 5 | 1 1 2 2 3 3 2 | 3 3 5 5 6 6 5 3 |

1. 乙姫のうたのおおひめさんは トントンカラリン
2. ウラシマクラウモ トントンカラリ コガネノタスキダ



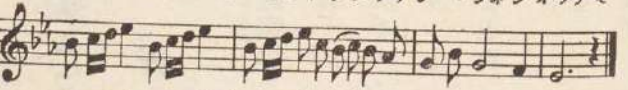
5 6 7 i 5 6 7 i | 5 6 7 i 6 5 6 5 4 | 3 5 3-1 | 2-0 |

トカラリトカラリ トカラリはたをおりました  
トカラリトカラリ トカラリウタッタ オリマシタ



1 1 9 5 1 1 6 5 | 1 1 2 2 3 3 2 2 | 3 3 5 5 6 6 5 3 |

こがねのたすきを せなかにもすんで トントンカラリン  
マンネンオツタモ トントンカラリン マンネンオツタモ



5 6 7 i 5 6 7 i | 5 6 7 i 6 5 6 5 4 | 3 5 3-2 | 1-0 ||

トカラリトカラリ トカラリはたをおりました  
トカラリトカラリ トカラリウタッタ オリマシタ



トンカラリンと  
機を織りました  
浦島太郎も  
トン／＼カラリン  
黄金の襷で  
トンカラリンと  
機を織りました  
千年織つても  
トン／＼カラリン  
万年織つても  
トンカラリンと  
唄つて織りました

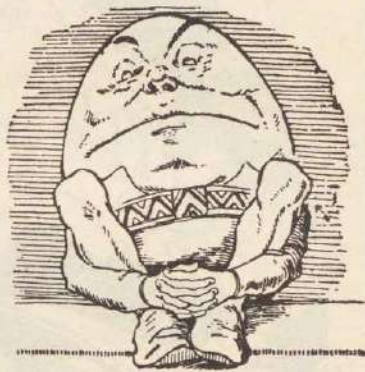


龍宮の 龍宮の  
乙姫さんは  
トン／＼カラリン  
トンカラリンと  
機を織りました  
黄金の襷を  
脊中に結んで  
トン／＼カラリン

乙姫さん

野口雨情





# 鏡國めぐり (長篇童話)

## 西條 八十

### 十八、詩のお講義

「あなた、詩のお講義が出来て？」  
と、あやちやんに訊かれて、飯櫃左衛門はちよつと黙りたやうな顔をして、

うたをきいけふもさびしむ。

くろきつきこのまにいでて  
ひかり、たいちをながる。――

「い、い、初めはまづそこら位でい。」  
と、飯櫃左衛門が止めました。それから、エヘンと一つ、さも勿體ぶつたやうな咳ばらひをして、

「いまの詩の中には、ずいぶん難かしい文句がある。それにところ／＼間ちがったところもある。で、お講義はと云ふと、いゝか、まあ聞きなさい。」もくせいのはやしのなかに」と、たしかお前はいま讀んだな。それからして違つてゐる。もくせいのはやしなんてものがあるもんぢや無い。これは明らかにもくべいのはやしとあるべきだ。すなはち李兵衛といふ人が持つてゐる林のことだ。」

「でも、もくせいつてのはあの、木の名前ぢやないんでせうか？」

「フン、それしきのこと！ 凡そ世の中に何ひとつ拙者に出来んと云ふことは無い。」  
と答へました。

あやちやんにはこの答がたいそう頼もしく思はれたので、そこで早速、

「ではあの「秋のおもひ」つて詩を知つてゝ？ あの、あたし、お姉さんに教はつたのよ。」  
と、云ひました。

「まあそこで讀んで聴かすがいい。拙者には、これまで出来てゐる詩はもちろん、まだ書いてゐない詩でも、ちやんとその先から意味がわかつてゐるんだから。」

と、飯櫃左衛門は大風に答へて、両手で膝を抱へ、空を見あげました。

あやちやんはすゞしい聲で、おぼえた詩を讀みはじめました。

「もくせいのはやしのなかに

と、あやちやんが一寸考へて訊きました。

「ウンニヤ、決してそんな事は無い。それは歴史を知らない者どもの云ふことだ。」李兵衛の林がナボレオンのウオーターローとともに歴史上有名な場所であるといふことは、いやしくも世界歴史を讀んだ者は誰も知つてゐることだ。」

「ではこの詩は歴史を讀んだ詩なんでせうか？」  
あやちやんが不思議さうにまた訊きました。

「さうさ。詩なんでものはどれもみんな歴史にあることを歌つたものだ。」  
飯櫃左衛門は、さう説明してもう一べん咳ばらひをしました。

「ではその次の「うたをきいけふもさびしむ」つて云ふのは。」  
あやちやんは改めて先を訊きました。

「ウン、そこか、そこにもやつぱり間ちがひがある。もつ／＼これは「うたをきい」ではない、「ぶたをきき」がほんたうなのだ。李兵衛の林のなかにはいつ



も豚が飼つてあつたのだ。(拙者も子供のときよくそこへ遊びに出かけたものだ。)その豚の啼聲を聞いたと云ふことなのだ。だからその次が「けふもさびしむ」とあつて、全體で、豚の聲ばかりきいてゐたから、今日はさびしかつた」といふ意味になるのだ。』  
 『ではそのあとの、「くろきつきこのまにいでて」といふのは?』

『もちろん、この「くろきつき」は言葉が詛つたので、ほんたうは「くろひつき」即ち「喰ひつき」の意味だ。つまり李兵衛の林であんまり豚ばかり弄つてゐたものだから、たうとうしまひに喰ひつかれてしまつたのだ。おもへば氣の毒なことサ。』

『まあ! ではその後の「このまにいでて」と云ふのは?』

『「このまにいでて」は「此間に出でて」だね、豚にあんぐり一咬みやられたもんだから、また咬みつかれないやう、「この間に逃げだして」といふわけ

『それから、「ひかり、たいちをながる」といふのは?』

『こゝはさう讀むのではなく、「ひかりたい、ちをながる」と讀むのがほんたうだ。即ち「ひかりたい」は「叱りたい」と云ふことだ。つまり豚にくひつかれたから、癩癩にさはつて叱りたいといふのだ。従つてその下の「ちをながる」は「血は流る」の詛つたので、咬まれた傷から血が流れるありさまを歌つたものだ。』

『まあ、すゐぶん變な詩ねえ!』

あやちゃんはお講義を聴いてから、驚いてかう云ひました。

『さうさ、おまへたちのやうな子供にはとてもわからん詩さ。だが、もうちつと先を讀んでごらん。さうすれば次第に意味がハッキリしてくるから。』  
 そこであやちゃんはまたその後をつづけました。



「だからさ、なにしろ今云つた通り林のなかで豚に喰ひつかれたんだから、どつちへ行つたらそのお医者の家へ行かれるか見當がつかない。そこで「いづかたとおもひ」すなはち「どつちの方だらうと思つて」といふ言葉が出たのだ。それでおしまひのこの「はるけし」つて言葉だが、これにまたすてきに難かしい意味があるのだ。どうだ、おまへわかるか。」  
飯櫃左衛門は高慢ちきに、鼻をビョコつかせてあやちゃんの顔をのぞき込みました。  
「なんだかあたし、さつぱりわかりませぬわ。」  
あやちゃんは、きまりわるさうにかう返事しました。  
「さうだらうな、辭引にも無いことだからな。」  
と、飯櫃左衛門は機嫌よく云つて、  
「では聴かせよう。そも／＼の中には豚に咬まれたときにつけるいちばんいゝ薬が書いてあるのだ。それは何かといふとこの「はるけし」のけしだ。これはあの草の芥子を云つたものだ。豚に咬まれてお



いづかたとおもひはるけし。」  
「どうだ、それで意味がすつかりわかつたらう。」  
と、飯櫃左衛門は得意さうに云ひました。  
「でも、「こひしや、ふるさと」つて何のことなの？」  
と、またあやちゃんが訊きました。  
「「こひしや」ぢやなくて、「おいしや」と讀むのがほんたうだよ。なにしろこれは大昔に出來た詩だから、傳つてくるうちにいろ／＼變つたのだ。で、豚に咬まれた傷から血がながれるので、そこで「ああ、お医者」つて呼んだのだ。」  
「その下にある「ふるさと」は？」  
「それはそのお医者のお名だ。つまり「古里」さんてお医者なのだ。拙者も子供のころにこのお医者の前を通つたことがある。どうしてなか／＼はやつたお医者だつたよ。」  
「ではおしまひの「いづかたとおもひはるけし」つては？」

醫者のところへ行かうにも路がわからず、そこでふと思ひついてそばに生えてゐた芥子の葉を採んでその傷にはつた、即ち「はるけし」で、そのために傷が癒つたと云ふ、つまりこれは全體で、豚に咬まれたときの手あてを教へた詩なのだ。」

あやちゃんは飯櫃左衛門氏の長つたらしい詩のお講義をのこらず聴いてから、「まあなんて難かしい、そのくせ馬鹿々々しい、變ちきりんな詩なんだらう」と思ひました。そして、「お姉さんはいつたどこが面白くて、こんな詩をいつも歌つてるのだらう」と不思議におもひました。

「どうだ、お前、わかつたか？」

このとき飯櫃左衛門が頭の上で聲をかけたので、あやちゃんは驚いて仰向いて、

「えへ。」

と返事しました。

「では聲を云ひなさい。」

飯櫃左衛門は至極むづかしい聲でかう云ひました。だけ握らせました。

「顔って誰も似たやうなものよ。」

と、あやちゃんが、ちつと考へてから云ひました。

「それが面白く無いと云ふのだ。」

と、飯櫃左衛門は言葉強めて、

「お前の顔についてるものは、人間が誰でも持つてるものだ。——眼が二つと、それから、——（と親指で空に顔の形を畫いて見せながら）鼻がまんなかに在つて、その下に口がある。いつだつて同じことだ。せめてその二つの眼が鼻の兩わきにでも附いてゐたり、口が額のどこにでも在つたら、少しはましだらうけれど。」

「だつてさうしたら體裁があまりよくないでせう。」と、あやちゃんが反對をとなへました。

「やつて見なくちやわからんさ。」

と飯櫃左衛門はブッキラバウに答へて、それなりちつと眼をつぶりました。

「さう〜お禮を云ふのだつけ」とあやちゃんは氣がついて、ていねいに、

「どうも有難うございました。」

と云つて頭をさげました。

「さよなら。」

飯櫃左衛門は、つゞけてきつぱりした聲で、又かう云ひました。

あやちゃんにはこの「さよなら」がすこしだしぬけに思はれました。

けれどもこんな風にはつきり歸れといふ指圖をうけてから、ぐづ／＼してゐては失禮だと考へて、そこで思ひ切つてシャンと立ちなほつて、手を出しました。

そして、

「さよなら。またお目にかゝります。」

と、出来ただけ元氣よく云ひました。

「ウンニヤ、今度逢つたとして、拙者にはお前が分らんよ。お前の顔は他の人間たらとクククリだからね。」

あやちゃんはまだ何が云ふだらうと思つて、しばらくそこに立つて待つてゐました。けれども卵男の飯櫃左衛門はもう二度と眼をあげず、また口も動かしませんでした。

あやちゃんはそこでもう一べん、

「さよなら。」

と聲をかけましたが、やはり何とも返事が無いので、仕方なしそろ／＼歩きだしました。歩きながらも、あやちゃんは、かう獨言を云はずにはゐられませんでした。

「なにが不満足極まると云つて、（こんなむづかしい言葉を使つて見るのがうれしくて、あやちゃんはわざと大きな聲でくりかへしました。）なにが不満足極まると云つて、こんな不満足極まる人間に、あたしは今まで會つたことが無い。——」

けれどこの言葉をまだ言ひ切らないうちに、おそろしい地震のやうな物音が、森中をふるはせたので、あやちゃんはびつくりしました。（つゞく）



二  
 おや、きつと母さんが忘れたに  
 ちがひない。晩にはお菓子は下さ  
 らない筈だが、これはうまいぞ、  
 金平さまでなんか買って来たにち  
 がひない、と考へたので僕は、皆  
 にさとられないやうにそろ／＼壺  
 のそばへよつてそばの柱へもたれ  
 ました。  
 一  
 一三



## お菓子の壺

ちいまごもつま

一  
 十月三日、ついさつきのこと  
 です。今考へてもをかしい大失敗  
 だ。  
 一三  
 それは今晚皆は金平さまのえん  
 にちへお父さんと出かけたのです  
 が、僕は進君のお家へゆく約束が  
 あるので皆と一所には行かなかつ  
 たのです。  
 九時頃だつたでしよ。僕が歸つ  
 て来たときにはもう皆も歸つて來  
 て、なんだかおもしろさうに話を  
 して居ました。なんの氣もなく、  
 ひよいと見ると室のすみに、何日  
 でもお母さんがお菓子を入れてお  
 く壺がふたもととりつばなしでおい  
 てあります。



四  
 僕は太急ぎで物干しへ出てゆくと、ふところでなんか動いた様なので氣味が悪くなつて手でさばつて見ると、木の葉バンにしては少し變です。は何をつかむだかと電氣の光の來る所へ來て見ると、どうです。僕の手にあるのは「せにがめ」と云ふ龜ノ子の小さい奴ぢやありませんか。

おや〜これはおどろいた、壺の中をかきまはした時、龜ノ子が首も手も足もちぢめたので、パンとまちがへたんだな。まさかあの中に龜ノ子が入つてあようとは、と思つて居る所へ昌夫が「兄さんお菓子とまちがへて龜ノ子をもつて來たでしょ」と云はれ、僕は書生や女中にまで笑はれちやつた。

三  
 皆は話に夢中になつて居ますと、お父さんが昌夫にあれへ水を入れてやらないといけないぞと云はれましたので、昌夫が壺のところへ行つてちよいと中を見ますと中のものが居ません

「お父さんおやしませんよ」「え、おない」とおどろいてお父さんや姉さんや昌夫や皆で壺のまはりを見まがし出しました。

今迄おたし、にげる筈はなし、不思議だと云つてますと、お母さんが今春雄がそこへいつてなんだかごそ〜してゐたからお菓子とまちがへたのかもしれないよ、とおつしやつたので皆が二階へ。



## 罪なき娘を探ねに(續き)

馬場孤蝶

(一)

さういふ恐しい何の音もしない静かさが、何れ程の闇づいたのだから、それは分らないが、王子は、その静かさに、自狀の心がまるで飛のやうになつて

家が遠くの所で見えました。その家は、いろ／＼な種類の建物に取りまかれてゐて小さい村か、小さい町とでも云ひたい位に見えました。やがて、王子は老爺さんとともに、その家へ行き着きましたが、門の正面のところにに小さい犬小舎が立つてゐました。

「この中へ入つてゐなさい、私が内へ入つて、祖母さんに逢つて来るまで、こゝで待つてゐなさい。老人といふものは誰でも皆片意地なものでな、知らない人に逢ふのを厭がるものなんだからな」と、主人の老爺さんが云ひました。

王子は慄へながら犬小舎へ這ひ込んで、自分が一人で怪しい老爺さんに逢ひに行くといふやうな餘り向う見ずな事をしたがために、飛んでもないところへ来たものだ、悔みだしたのです。

直きに主人の老爺さんは返つて来て、王子をその隠れ場所からよび出しました。何か機嫌を悪くした事があったものと見え、老爺さんは變つて面で、「この家でのお前の起居動作にはよく氣をつけて、間違を

行くやうな心持がし、頭の髪が恐怖のためにぞつと突つ立つてしまひ、冷いぞく／＼する感か脊骨を這ひ下りて行くやうな氣がしたのでした。けれども、やがて、ほんとに嬉しい事には、一生懸命に何か物音を聞きたいものだと思つてゐた王子の耳へ幽な物音が聞えて來ますとともに、その影ばかりの世界がたちまちにして實物の世界になつたといふ心もちがしました。それは何だか、何百匹もの馬の群が荒野の中を駆け通つて行くともいひさうな音であつたのです。

すると、その老爺さんが口を開いて、「釜が沸つてゐる吾々は家で待ち受けられてゐる」と云ひました。二人はそれから少し進んで行きますと、王子の耳には、水車仕掛の木挽場で何十挺もの鋸が一度に木を挽いゝゐるともいひさうな音が聞えだしました。老爺さんが、「祖母さんはよく眠てゐる、何うだ、あの野郎は」と、云ひました。

やらないやうにしなければいけないぞ。さうでない、飛んでもない事になるんだからな。眼と耳は何時もよくおつ開いてゐて、口の方は何時も開けちやならないぞ。言ひつけられた事は、何だらうと、ただ黙つて、その通りにやらなければいけないぞ。何か有難いと思つたら、たゞ心の内だけで禮を云つて置けよ。人から話しかけられた時でなくば、決して口をきいちゃあならないんだぞ」と云ひました。

王子が開口を入ると、鶯色の眼で麻色の縮れた髪の毛、非常に美しい處女の姿が見えました。若い王子は心のうちで、「うん、老爺さんが、こんな美しい娘を幾人も持つてゐるのなら、俺は彼奴の婿になつてやつてもいいぞ、本當に美しい娘だな」と、云ひました。で、その娘が食卓の支度をし、食物を持つて来て、それを食卓の上へ按配してから、王子のやうな知らない男が其所にゐるのなぞは一向氣がつかなくつたかのやうに、爐の火の傍に坐るまでの、娘の様子をば、王子はつく／＼と見てゐました。娘は

編針と糸を取り出して、靴足袋を編みだしました。主人の老爺さんはひとりで食卓について、新たに僕になつた王子にも、その處女にも一緒に食へとは云ひませんでした。何所を見ても、祖母さんの姿は見えませんでした。老爺さんの食慾は驚くべきものでありました。老爺さんは直きに出してあつた食物を皆食べてしまつたのですが、それは、普通の人の十二人前たつぶりあつたのです。やがて、すつかり満腹してしまふと、老爺さんは、娘に向つて、さア残つてる食ひ餘しを食べていよ。鉄鍋の中に残つてゐるのをお前の食べ物にしなさい。だが、骨は犬にやりなさい」と、云ひました。

王子は、娘に手傳つて、老爺さんの食ひ餘しをか



ころへ案内して貰ひなさい。」

それで、王子は、もう老爺さんに此方から話をしかけてもいいのだらうと思つて、口を開きかけるといふと、主人の老爺さんは、雷のやうな顔を王子へ向て、かう怒鳴りつけました。「僕の犬野郎。貴様がこの家の掟を守らなければ、貴様の首はなくなるぞ。黙れ、あつちへ行け。」

娘が、王子にこつちへ来いといふ意味の手真似をしたので、その後へついて行くと、一つの部屋の戸を開けて、それへ入ると顔いてみせた。王子は、戸口に少し立つてゐて、娘に話かけたいと思つた。それは、娘が何だか悲しそうな様子であつたからであり



ました。けれども、王子は話をなし得ませんでした。何故だといふと、老爺さんに怒られるのが怖かつたからでした。

(11)

き集めはしたものの、そんな物で食事をするのは嫌で堪らなかつたが、然し、結局、量は澤山あつたし食つてみると、大變旨い物でありました。食事の間王子は、たび／＼娘の方を一寸々々見て、話しかけさうにさへしたのであつたが、娘の方は一向相手になりさうにしなかつた。王子が、話しかける積りで口を開かうとするたんびに、娘は、「お黙りなさい」とでも云ひさうな、恐しい顔で、王子を睨みつけたので、王子はたび／＼眼だけで意味を通じることができたのみでした。その上に、主人の老爺さんが、大食ひの食事を終はつてからは、爐の傍の腰架に寝轉んでゐたので、王子と娘と話したのであつたら、何も彼も老爺さんに開けてしまふ譯であつたのです。

その晩、夜食の後で、老爺さんは王子にかう云ひました。「旅の疲労もあるだらうから今日から二日間休んで、家の中の様子を見て置きなさい。だが、明後日は、私と一緒に來るんだぞ。私がお前のすべき仕事を極めてやるからな。あの處女にお前の養つて

王子は、一人でその部屋へ入つてから、心のうちでかう云ひました。「あんな親切な心を持つてゐる娘が、あの意地の悪い老爺の本當の娘である筈はない。何うも、あれは俺の身代りになつて此所へつれて來られたその娘に違ひないと思ふ。だから、俺は、生命がけで彼の娘を救ひ出すためのこの冒険を仕遂げなければならん。」

王子は、寢床へ入りましたけれども、なか／＼寝つかれませんでした。自分さま／＼な危険に取り巻かれてゐて、自分を助けてさういふ危険から遁れ出させてくれるのは、その娘の力のみであるといふ風に、王子には思はれたのでありました。

翌朝目が覺めた時に、王子が一番に考へたのは娘の事であつた。娘はどうしたらうと思つて、部屋を出ると、もう娘は起きてゐて、せつせと働いてゐるのでした。王子は娘に手傳ふ積りで、井戸から水を汲んで、それを内へ持つて行き、鉄鍋の下の火を焚きつけ、それから、王子の考へて、娘の手助けに





少しでもなるであらうと思はれるやうな事は何でも  
 彼でも嘗ての如くです。彼に聞かすと、王子は、こ

それから、厩をすつかり掃除するんだ。俺が戻つて  
 来て、飼糧槽が空だつたら承知しないぞ氣をつけろ  
 よ。」と云ひました。王子は、自分で鋤き鎌も扱つた  
 ことは一度もないが、百姓が使つてゐるのを度々見  
 てゐたので、わけの無いものだと思つてゐました。  
 王子が自分の寝る部屋へ歸つて来ると、處女が足音  
 を忍ばせて、其所をそうつと通り過ぎながら、「何ん  
 な仕事を貴郎に云ひつけました？」と、囁きました。  
 「明日の仕事は、ほんとに何でもない事ですよ。馬  
 にやる草を刈ると、厩の掃除だけなんですせ。」と  
 王子は答へました。すると、娘は溜息をついて、か  
 う云ひました。「あら、あなたはほんとにお氣の毒な  
 方ですわねえ。あなたそれは大變な事なんですよ。  
 何うして、誰にだつて、決してできる事ぢやない  
 んですよ。彼の白馬は主人の祖母なんですがね、彼  
 れが大變な大食ひで幾ら食べても、何時までもお腹  
 がすいてるといふ大變なものなんですよ。二十人の  
 男があつた馬の一日の食物を刈るためにかゝりきりて

の新たな家の様子をいくらか知つて置かうと思つて  
 外へ出たが、何所でも祖母さんなるものゝ影さへ見  
 えぬのを、甚だ不思議に思ひました。ぶらついてゐ  
 るうちに、王子は廣場へと出たが、其所では、綺麗  
 な白馬が別にその一匹だけにあつた厩に入つてゐま  
 した。それから、も一つの小舎には、二匹の白い顔  
 の犢をつれた黒い牝牛があつた。そして、鷲鳥や、家  
 鴨や、牝鶏のなき立てる聲が、遠くで聞えてゐた。  
 朝飯、晝食、夜食、それが皆前の晩のやうに旨い  
 ものでした。そして、處女の前で黙まつてゐなければ  
 ならんといふ困難な事さへないのでしたら、王子  
 はその家の暮らしに全く満足して居られるのであつ  
 たでせう。二日目の晩になると、王子は、兼て言ひ  
 つけられてゐたとほりに、翌朝の仕事に對する指圖  
 を聞きに、老爺さんのところへ行きました。王子が  
 入つて行くと、老爺さんが「明日は極くわけのない  
 仕事をお前に言ひつけてやるせ、この鎌を持つて行  
 つて、彼の白馬が一日食ふだけの草を刈つて来て、

もう二十人の男が厩が掃除にかゝりきりなんです  
 わ。それなのに、何うして貴郎一人でそれができる  
 ものですか。ですけれどもね、私がお話する通り  
 になさるんなら、きつとできませう。それよりほか  
 にはあなたにこの仕事ができる氣遣ひは何うしたつ  
 てありませんわ。ですからね、飼糧槽へ草を一杯つ  
 め込みましたらばね、あなたは、牧場の草の中に生  
 えてる蘭草でもつて強い繩をなつておしまひなさい  
 よ。それから、強い樹を切つて抗をおこしらへなさ  
 いよ。それは、みんな白馬に見せるやうにしてこし  
 らへなければいけないんですよ。さうすると、馬は  
 それを見て、それは何にする物なんだとあなたに聞  
 きますからね、あなたは其所で、この繩でもつて、  
 お前がもうこの上物を食ふことができないやうに、  
 お前の舌を縛るんだ。それから、この抗へお前を縛  
 りつけて、お前が厩ちう穀物や水を撒いて歩くこと  
 ができないやうにしてやるんだ。」と、お云ひなさい  
 よ。」さう云つて、娘は、來た時と同じやうに足音を  
 忍ばせて、行つてしまひました。(つづく)



返事しいしい  
 頭ふりふり  
 せつせとこちらにやつて来る  
 蟻に御馳走  
 やりませう



蟻

若山牧水

まいにちまいにち  
 見てをれば  
 お庭の蟻も  
 かはゆるなる  
 蟻よ蟻よと  
 こちらで云へば

# 隣の金太

沖野岩三郎

或所に金太といふ若い男がりました。幼い時から學校にも行かず、お家の仕事も手傳はず、毎日毎日ノラクラして遊んでゐましたが、もう二十になつても、何の役にも立たないので、とうとう家を追い出さ

れる事になりました。



金太は、お父さまやお母ア様に別れて、隣の村へ行きました。けれども何所へ行つたつて、仕事も何もしない金太を養つてくれる家は一軒もありませんでした。で、我がなしに



又た自分の村へ歸つて來ました。

丁度其時、金太の村には疱瘡といふ恐ろしい病氣が流行つてゐました。ノラクラ者の金太でも、幾分か親の恩を感じて居ましたので、両親の事を心配しながら、家へ歸つて見ると、両親は十日程前に、瘡で亡くなつたと聞きました。

流石の金太も悲しみました。けれども學問はなし力はなし、これから先き、どうして生きて行つて宜いやら知らないで、思案に暮れてゐましたが、不

解お隣りの二色長者といふ家には、マダ誰一人瘡

えてゐる、大きな種の樹の枝に這ひ掛りました。家の中人達が皆な凝靜つた頃、金太はその種の樹の枝を、ザハ／＼と揺ぶりました。

何だらう？と思つた主人が出て行つて見ると、種の樹の枝に真黒い大きなものが居るので、

「誰だ！」

と聲をかけました。

すると枝の上の金太は、

「俺は疱瘡の神様だ！」と云つて、杖から一羽の鳩を取出して、それをバタ／＼と飛ばせました。

「あ、あなたは疱瘡の神様ですか、どうぞ私の家だけは、お出で下さらないやうに、お願ひ致します。」長者は頼むやうに言ひました。すると金太は、勿體ぶつた聲で、

「隣りの金太を子に貰へ！」

と云つて、又た一羽の鳩をバタ／＼と飛ばせました。隣りの金さん、あのノラクラ者の金さんですか。」



に罹つたものがないといふのを想ひ出して、或晩の事金太は兩の杖へ鳩を三羽宛入れて、そつと二色長者の塙を越えて、座敷の庭に生

主人は呆れた聲で申しました。

「さうだ、あの金太はノラクラのやうに見えるが、本當は賢いんだ、日本一の賢い男だ！」

と云つて、又た鳩を一羽バタ／＼と飛ばせました。

「あアさうですか、そんなに賢いお方ですか、では私の家の養子に致します。その代り抱捨だけはどうぞ御免下さいまし。」

長者は手を合せて拜みながら言ひました。

「隣りの金太を養子にするなら、此所だけは、立寄らないで歸つてやる。」

金太は兩の袂に入れてあつた鳩を皆な一度にバタバタ／＼と飛び去らせました。

「有難うございます。それでは隣りの金太さんを必ず養子に致します。其の代りどうぞ抱捨だけは……」

主人がかう言つた時、楸の樹の枝が、バリ／＼と裂けて真黒いものが、どすん！ と庭へ落ちて来たので、きゃーッ！ と叫んで家のなかへ逃げ込みました。



## 金を掘る話

或所に一人の長者がありました。其家は代々呉服を商つてゐましたが、或日其所の主人は、

「かうし、呉服を買つて、一反につき置かつつの利益を得て居ては、とても百年たつた所で、今の財産の十倍にもなりつこはない。何とかして一時に大金持になる工夫はないか知ら？」と云ふやうな事を考へました。所が一度にお金持になる方法は、山から直接にお金を掘つて来るのが、一番宜い事だと考へましたので、早速隣村の栗左といふ金掘りの所へ相談に參りました。



さア、家内中大騒ぎになつて、槍や鐵砲を提げた若い男達が、提灯片手に駆けつけて見ますと、庭の真中で隣りの金太が、大怪我をして呻吟いてゐました。

それは金太が、此の二色長者の養子になられると聞いた時、餘り喜んだので、樹の枝から迂り落ちたのでした。

金太は其の腕、とう／＼死んでしまひました。

「河所か此の近邊に金や銀の掘る鑛山はありませんでせうか、あなたが掘つて下さるなら、私はその費用を出しますか……」

長者がかう言ひました時、金掘りの栗左はにっこり笑つて、

「それは何でもない事です。私はあなたのお宅へ參りませう。そしてよく御相談致します。」と申しました。

それから長者は栗左を伴れて歸りました。栗左は長者の家へ泊つて、毎日近所の山を調べに行きましたが、丁度長者の屋敷から一町程東に、銀山があるのを發見したと言ひました。

長者は大變喜んで、早速栗左にそれを掘ることを頼みました。

「宜しい、千兩出して下さい。私は一月後にきつと一萬兩の銀を掘つて見せます。」

栗左がさう云つたので、長者は早速、お金を千兩栗左に渡しました。すると其の翌る日から栗左は、

山の真中へ、大きな穴を掘り初めました。  
カチン、カチン、といふ鑿の音に交つて、栗左の美しい聲で唄ふ歌の聲が、暗い穴の中から洩れて来ました。

長者は毎日々々穴の外から中を覗き込んでおましたが、とうとう一月たつたが、銀の破片も見えませんでした。

「どうです、銀はありましたか。」

長者が心配さうに聞きますと、栗左はにこ〜笑ひながら、

「旦那様、銀どころの騒ぎぢやありません。金です、金です、金です。」と申しました。

「えッ？ あの金がありましたか。」

長者は眼を圓くしました。  
「たしかに金です。こんな色の金と一ヶ割掘つて見て、若し銀

手に溢れる程載せてゐる、大判小判を見て、

「やア、これは大變だ、山の中から大判小判が掘り出されるとは有難い。中には一體どれだけある？」と尋ねました。

「さあ百萬兩はありませう。旦那様、あなたのお家は、今日一日で大變大金持になりましたよ。」と云つて、栗左は氣味悪く笑つてゐました。

所がその翌る日、どうしたものか栗左は見えませんでした。長者は不思議に思つて、穴の中へ入つて行つて見ますと、穴はすうつと斜めに七十間ばかり掘つてありました。

「何所に大判小判があつたのだらう？」と呟きながら、暗い穴のジメ〜した所を奥深く入つて行きますと、向うの方にチラリと光りが見えました。  
「はてな？ こんな穴の中に明りの射す筈はないが

が見付からなかつたなら、きつと此の奥には金があるのです。もう千兩お出しなさい。きつと一月後には十萬兩の金を掘つてお目にかけてます。」  
栗左がさう言つたので、長者はまた千兩出して栗左に渡しました。

暗い穴は段々と奥深く掘られました。長者は毎日穴の外に来て、中から洩れて来る鑿の音を聞くのを楽しみにしてゐました。

さうして丁度二月の終りになつた時、長者が、穴の口に行くと、中から走り出て来た。金掘栗左は、

「旦那様、旦那様、大變です、大變です。金が出ました、しかも大判小判です。」と叫びました。

「何？ 大判、小判？ どれどれお見せ！」

長者は穴の中へ一問ばかり駆け込みました。そして栗左の胸



……と思つて、其の明りの所まで走つて行きますと、其所にはキラ〜と光るものが一面に散ばつてゐました。

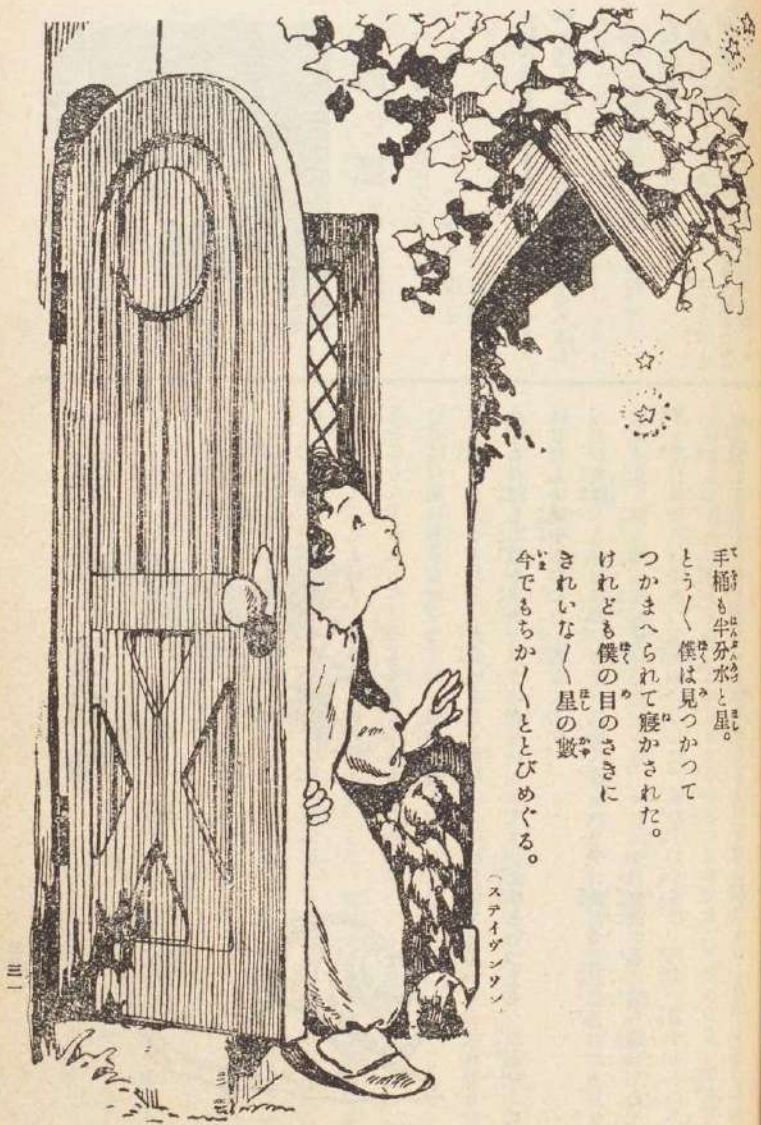
「やア、小判だ、大判だ！」と叫んで長者はいきなり其の大判小判を拾ひ集めました。

其時、どうした機みか、どうん！ と小い響きかして、土の塊が長者の頭の上から落ちて来たのでびつくりして、振仰いで見ますと、頭の上には穴が明いてゐて、大きな家の中のやうな所が見えました。

長者は驚いて能く〜見ますと、どうも見覚えがあるのです。穴から首を突出して見ますと、見覚えのある筈です、其所は長者の金倉でした。

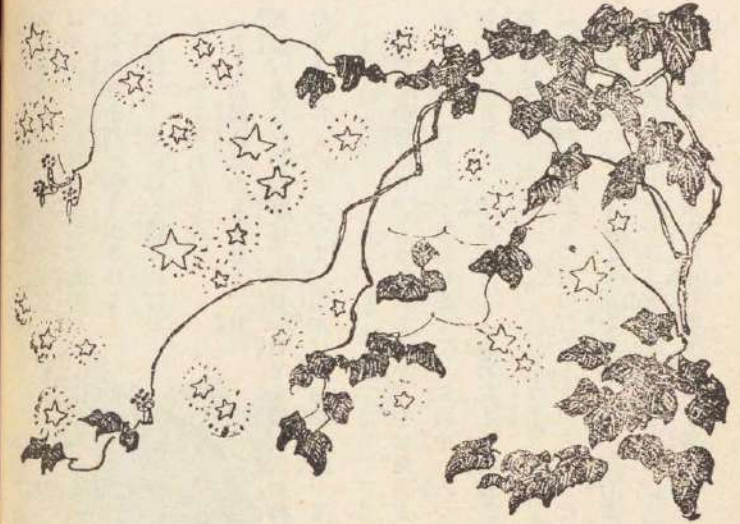
「先ア！」と呆れて一番大きい十萬兩容の箱の蓋を除つて見ますと、底には大きな穴が明いてゐて十萬兩のお金は儘かばかりしか残つてゐませんでした。

(なほり)



手桶も半分水と星。  
 とう／＼僕は見つかつて  
 つかまへられて寝かされた。  
 けれども僕の目のさきに  
 きれいな／＼星の数  
 今でもちか／＼ととびめぐる。

(ステイゲンソン)



寝る時そつとぬけ出して

内藤豊雄

すだれと窓と屏風越えて、  
 明りはおどろしき、臺所。  
 頭の上にはちらくと  
 まあ澤山のお星様。  
 公園だつてお寺だつて、  
 こんなに人は居やしない。  
 木の葉もこんなに多かない。  
 僕を上から見下して  
 暗にちらつく星の群。





露の願ひ (少女自伝)

東京府下大森不入斗三八三

勝本俊子

(十四歳)

私はふと目をさました。つめたい風が頬をなでました。そのおかげで目がさめてしまひました。

機を見るに窓が開いて居りました。

「だれが開けたのだらう。」

私は起て窓ぎはへ参りますと、不意に涼しくて床の時の音も、窓の音も消えたりして居りました。

「何か、おいて下敷を穿らしていらつしやいます。はたり！ 靴の手に支障がかりました。」

「お嬢様。」

とかすかに私をよんだやうでございます。

かへるの聲一つしない、この静かな夜にあまり大きな声でよばれたのですが、私はむいどきりとなりました。

「お嬢様。」

ぐ近くに聞えるやうです。

「私です。」

又聞えました。

私は思ひきつて

「どな

と申しました。

「大きなお聲をお出しになると、びつくりしますよ。私はお月様のお手からこぼれた夜露です。」

私は手を見ますと、さつきおちたまんまるの露の玉からうき出て居るやうな顔がにこにこして居ります。

# 無花果の御殿 (童話)

千葉新一郎

無花果御殿の奥の間といつても、やつぱりこの樹の廣くて大きな一つの葉の上なんです。が、小つちやい雨蛙が兩足を出来るだけ前にふんばつて、しよほく降る雨にぬれながら天をにらんで居ました。そして自分くらゐ偉い者は何處にもゐないぞつてな、頗る高慢ちきな顔をして居ました。多分いちじく御殿の王様は自分だと思つて居るからでしやう。まだ誰も苦情を申出でたものがないからです。王様といつても、臣といふのはせむしの蝸牛がたつた一匹なんです。

だが實際、こんなに毎日のやうに雨に降られちや、誰だつて表に出たかありません。鶯も鳥も鳩も雀も申合せたやうに、それら自分達の巢に閉ぢ籠つて居て早く晴ればいいなあつて思ふのでした。屋根下の小雀は、可愛い首をちよいちよい出しては「お母さんまだ晴れない」つて訊ねるのでした。けれども、燕だけは犬吠な聲があると覚えて、雨の音をせつせと飛び廻つて居るのでした。そして

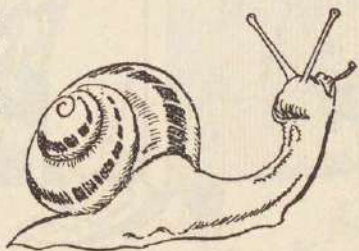
「時におはは、もう先つきからお腹が空いて困つてゐるんだが、一體蝸牛の奴は今まで何をぐぐくしてゐるのか知らん」と、言ひながらゴクリと唾液を呑みこんで、お腹を撫すりました。蝸牛といへば、蛙のゐる所から一尺ぐらゐる下の枝をのそりぐと這ひ上つてゐるの

でした。蛙は下を見るのは王様の威厳に關するものとひどくそれを氣にしているものですから、心の中ではやきもきして居ても、決して見やうとしないのです。

全く、この雨蛙が自分は王様だと意張らうとするのに無理はないのでした。なぜつて言へば、それは一つ



三三



「まあ、あなたなの。でもなにしにいらつしやつたの」

とたたく申しました。露は

「お月様」

と申しました。

「お月様」

私は驚き返して申しました。

「お月様は、あなたを見たい」と、いつもおつしやつて居たのです」

「まあ、そのなの。ちつとも知らなかつたの、なぜ？ お話をして下さいな」

「え、お月様は人間の心をみんな知つていらつしやるのです。あなたのよい方だと云ふ事は、しとあなたのお家におた見子が、お話したのでよくご存じなのです。それなのに、あなたが一度もお顔をお見せにならないのでお月様は一度あつて褒美をあげてあなたのおこび顔が見たい、早くあひたい」と思つていらつしやつたのです。ですがなか／＼とお顔をお見せにならないので、この五六日はお話をしなさいと、お月様は私に話して下さることになつて、

ちつともお顔をお見せにならないばかりでなく、私共の仲間をみやみに下界へおなげになるので、私共はたつた一夜の命になつてしまつたので困つて居ります。此後この事が幾度となくつゞいた日には、私共はなくなるばかりか、下界はから／＼になるだらうと心配して居りました。丁度私が参りますやうになりましたので、前もつて風の神や、お女中さんにごの窓のあいて居る事をわすれさせるなどいろ／＼苦心して、やつとあなたをお呼び申したわけでございます。お月様もあなたを見る事ができて、お喜びになつていらつしやいませう。あら／＼あのやうにうれしそうにと申しました。

私ばふと空を見あげますと、なるほどうれしそうなお顔のやうに見えます。

「露さん、それでは私毎日お目にかゝる事にしますわ」

「え、それから、まだ申し上げなければならぬ事がございます。それはお星様からおうかゞひした事でございます。あなたが毎日

の魔法を知つてゐたから仕方がありません。といふのはかうやつて天をにらんでそれからお腹をぶつと膨らして「キヤラココロ／＼」つて呪文を唱へると、美しい天氣が直ぐに曇つて来て、雨がしよば／＼降つて来るのです。ところが近頃は殆んど毎日のやうにこの呪文のかけ通しだものですから、雨が降るは／＼と／＼近年にない大水に出會つたのでした。それで花も動物も人も随分と苦しむ目に會ひました。新聞なんか讀んだことのない蛙の王様は、自分がそんなことをしてかしたとは気がつかないのです。それに天ばかり見つめてゐるので、猶更に知らないのです。今年始めての親譲りの魔法が大變に面白いのでやたらに、呪文のかけ通しだつたのです。

「畜生！ まだ歸らね——」

長い間田舎にあづけられてゐた雨蛙は、王様の威厳もお腹が空いたので、忘れてしまつて汚い言葉で呷鳴りました。この時蝸牛はやうやく六分目ぐらいまでやつて来てゐました。勿論王様の言葉はもう耳に入つてゐたのですが、言葉が出ないのでですから側まで行かなければ駄目なんです。しかし蝸牛を啞と／＼に氣の毒なものだと思つてはいけません。

それは二本のニョキツと立つた角の先きについてゐる目玉が見えるといふばかりでなく思ふことがやんと解るので、目でものを言ふといふのは元は、こゝから出たんですが、それ程に聡明な解もまた彼に立つには即があるものでした。お腹に火をつけられたつて、もうこれ跳び早く解けることは出来ないくらいに急いでゐるのですが、そののろいこと！

氣短かの王様も、ほと／＼弱つてしまひました。

「王様、ただ今歸りました。おそくなつて申譯がございません」

やうやくのことで歸り着きました。王様の頭の上で蝸牛の目玉がグルリグルリ廻轉してものを言つてゐました。雨蛙はもう小言をいふ段ではないのです。何よりも先づお腹をこさへなければなんにも出来ないのです。

「王様、今日はもうどちらに参りましても何にもございませぬ」

蝸牛の目玉が悲しさにグルリグルリ廻つてか 申しました。雨蛙の王様のしほれ方は本當に赤ちやんがベソをかく時、そつくりでした。その時、青い顔が土色に變りまし





なまる夕の祈り、朝の祈の事でございます。お祈りなまる時は、お日様のいらつしやる時なまるのでございます。くわしく申しますとお日様とお月様は御兄弟でいらつしやいます。仲がお悪くございます。夕の祈はお月様のいらつしやる時なまるので、又、朝の祈も両方ともお日様にお取られになつたのでおこつていらつしやいます。(あんなよい子が、どうして私なさらうのだらう)とおこつていらつしやる内にも、なげいていらつしやいます。どうぞこれからおきをつけになつて！」と長々と申しました。

私も、あゝ悪かつたと思ひまして、もう一度露を手のひらに乗せたまゝ、夕の祈をしました。露は、

「一夜の命でこんな楽しんでるものはありません。私一人です。まだ生きて居る仲間の者が無いなら、どんなにもなるこぶ事でせう。お月、聞かぬやうにございませうが、よくわかりませう。」

私は、どうせ一夜の命なら、だいてれて安樂に月のお宮に歸してやらうと思ひました。「それでは露さん、私がないて寝てあげるから、安樂に月のお宮にお歸へりなさい。」

「ありがとうございます。」  
「それでは差てよ。」  
と、私は露をにぎつたまゝ床にはいり、露をにぎつて居る手をおむねにおいてくれました。露は月の宮へかへる時、  
「またあひませう。」  
と、申したそうですが、私は存じませんでした。

ふたたび露が、もとの露になつてたづねてまゐりました時、うれしそうにお月様のお話や、その内に御褒美を下さる事などとしよにお別れの時の事を申しました。  
「私は今、お月様の御褒美は何にかと考へて居ります。(なほり)。」

た。實際、それ程にこの雨蛙は食べ物が無いといふことが、がっかりさしたので、常平生から至つて食辛棒ですぐお腹をペコ／＼にしてしまふのです。日に幾度も食物探しにお使にやられる蝸牛は、苦るしくつてたまらないのですが、大好きな雨の御馳走には代へられないのです。それに又いくら逃げ出さうとしても、直ぐに追かけられるのを知つてゐるのですから、仕方なく奉公してゐるのです。雨蛙の王様は、悲しさとくやしさとで目に涙を流してゐたものですから、蝸牛も目玉の廻轉を止めてゐましたが、涙をふるひ落すと、  
「王様、本當でございます。なぜと申しますと、まあ聞き下さいませ。あんまり雨が降り過ぎたので下では大水が出て、大變なでございます。誰も食物を求めることが出来ないのださうでございます。一番働き手の蝸牛さん所さへ、今ちや食ふや食はずだつて言つてたんでございますから。」  
と、氣の毒さうにかう申して、二本の角をうなだれました。  
雨蛙の王様もこれを聞いて、さすが幾分か胸にこたへたと見えて、兩足をブルブル震はせながら、眼を閉ぢてゐました。  
久しぶりに雨がやんでゐました。さつきから屋根下で首だけ出して、無花果御殿の出来事をこつそり見てゐた親雀が、何を思つたか、ついと飛び出して何處かへ飛んで行きました。

「王様！ 雨蛙の王様！ 力なく目を見開いてみると、親雀が飛んで来てゐます。その喉には数匹の蝶と蚊とをくはへてゐました。」  
「さあどうぞ、つまらないものですが、忍び出して見せようかしら」と、言ひながらで

の喉に飛べました。親雀が王様の腹にさしこむたぐりなしてたり、  
「どうも御馳走様！」と言つたのは、ペロ／＼と舌を出して呑み込んでお口の廻りを舌でグルリとなめまはしてからでした。そして  
「あなたは親切な方です。この御恩に對してきつと何か御禮をします。」  
「いいえ、お易い御用なでございます。御禮なんかと仰有つて戴いては、お恥かしいのでございます。ですが王様、一つお願いがございますが、それも難しい事は無いのでございますが……」  
「うむ／＼、私に出来る事なら何でも……」と申しましたが、もうけつして高慢

ちきな様子ではありませんでした。  
親雀は聲低く何か物語りました。  
蛙の王様は早速承知しました。  
親雀は喜んで屋根下へ飛んで歸りました。小雀達は親雀が歸つて来ると、  
「あした天気！ あした天気！」とて囀つてゐました。全く馬鹿／＼しい位に喜

び騒いでゐました。ふと見ると西の空は夕焼けで眞赤でした。  
翌日は、すつきり晴れて、美しい青い空にお日様が輝いてゐました。それから毎日／＼お天気続きでしたが、暑さがそれとともに加はつて来て、「おお、暑くてとてもたまらない」と誰も／＼困つてゐる時、無花果の葉陰から元氣のいい聲で「キヤラコ／＼／＼」と雨蛙の王様の呪文が久しぶりに聞えました。  
見る間に空が曇つて、バラ／＼ザアつと夕立がやつて来ました。半時間もあると、綺麗に晴れてその後の涼さと心地良さ！ それからといふものは暑くて／＼仕様の無い時には、きつと夕立が降つて来るのでした。  
親雀の顔は一體何だったのでせうか？ (なほり)

ポ・ン・テ・い・い・い



1 きみ だいぢよぶかい こよのぢぢさんば  
すあぶん こはいぜ

なに だいぢよぶだよ ばんにんの  
ぢいさんば とんまだから

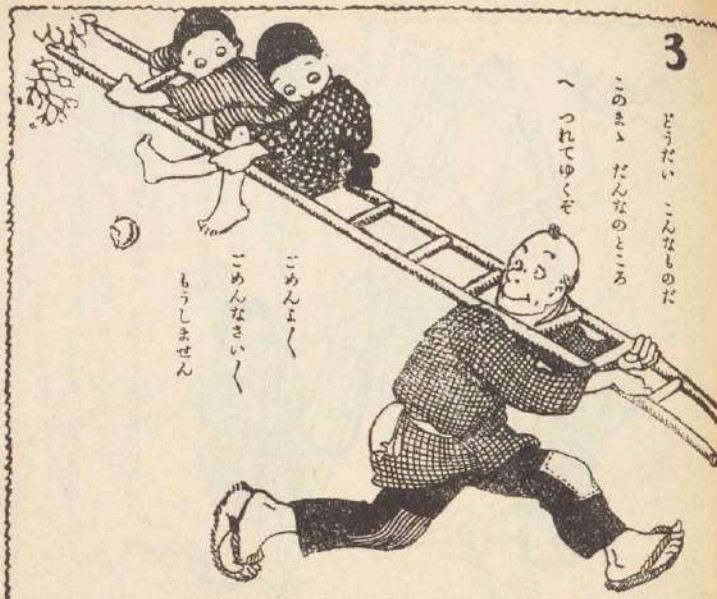
おや こよものくせに  
ひとのこしを とんまだなんて なまいきな

2



おいしいね  
うまいね

いまに ひどいめに  
あばせて やるから  
そのときにあやまつたつて  
しうおそいぞ

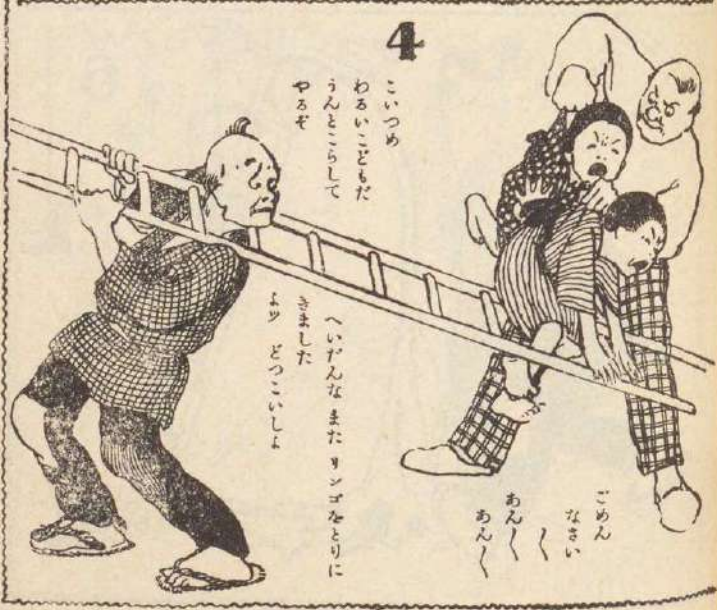


3

どうだい こんなものだ  
このまよ だんなのところ  
へつれてゆくぞ

ごめんよー  
ごめんなさいー  
もうしません

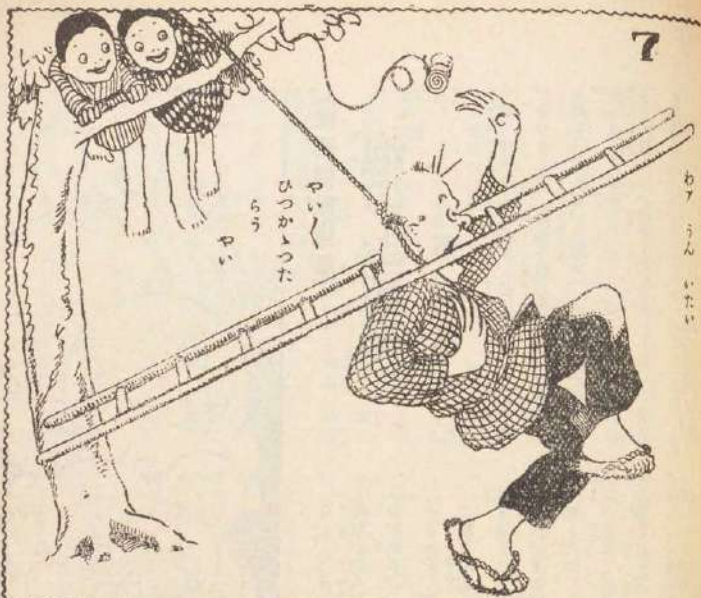
4



こいづめ  
わるいことだ  
うんとこらして  
やるぞ

へいぢんなまた ヲンゴをとり  
きました  
よッ どつこいしよ

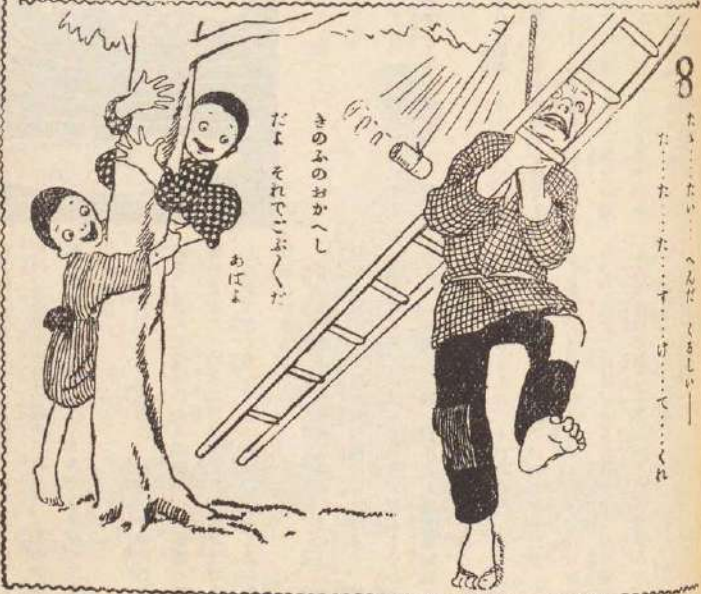
ごめん  
なさい  
あんー  
あんー



7

やい  
ひつかよつた  
らう  
やい

わア...ん...いたい



8

きのふのおかへし  
だよ それでこぶくだ  
あはよ

た...た...た...す...け...べ...くれ



5

きのふは よくも ひとを ひどいめにあはせたな  
けふは かたきうちだぞ どうするか  
きみ これくらゐかい はやくしないとけないよ

だいぢよぶだよ



6

きたよ

きたよ

おや きのふに  
こりすに またやつて  
きたな きのふのとほりよたらやるぞ



(諸國傳説童話)

# 泡のお姫様

藤澤衛彦

昔、出雲國八束郡に、佐太二郎といふ少年がなりました。渾名を歌二郎といはれるくらゐ歌をうたふ事が上手で、夕方、彼が突道湖畔をさまよひ歩きながら、美しい聲でうたふ夕暮の歌には、誰でも引き入れられない者はありませぬでせう。

しい、ヤーハレ、響して、ヤーハレ、日輪様の御入りぢや。  
 日が落ちて、ヤーハレ、西の山端になあ  
 ヤーハレ、黄金花さき、ヤーハレ、咲いて散る西山へ。

其すきとはるやうな歌聲にきき惚れて、村の人達は、その仕事の手を休めるのが常でした。聞き入つてゐるうちに物悲しくなつて、病氣の人などはほろりと涙を流し、秋なら湖畔の萩の花まで、ついで、ほろりと零されるのでございませぬ。

水鏡深く沈んで行きまして、佐太二郎の胸は叶つたわけでした。佐太二郎は、おもしろさうにそれを見てなりました。やがて、文鏡は池の底に沈みきつたと見えて、間もなくぶつくと水の上に泡が立ちました。ところが、その泡といふのが、普通の泡ではなく、赤や青や黄や紫やそのほかいろいろの色を混ぜた綺麗な泡でしたので、おや〜と思つて、なほも見てなりました。びん〜其泡が大きくなり、しまひには祭囃提燈ほどの大きさに膨まり、たうとうはちきれんと思はれました時、忽然と、泡の影から美しいお姫様が現はれ出ました。あつと、佐太二郎がたまげてなりませぬと、お姫様は、水の上から、おいで〜と手招きしてなられます。佐太二郎も、行く氣になつて、一足池の中に入みこみますと、とたんに、身體が深く、落込んで、それきり浮んで来ませんでした。

少年は、加賀村の神宮の神宮の中で居たこと知らしめてくれた者があつたので、それといふので、皆して神宮に行つて見ましたところ、なるほど、彼は、船の中で、ぐうぐう眠込んでなりました。そして、いくら起しても目をさましませんので、よんどころなく、そのまゝ連歸つて置きました。其時、眼の覺めた時には、生れもつかない盲目になつてなりました。で、皆して、さうなつたわけを尋ねましたが、佐太二郎は「十月二十一日」と答へたきりで、ほかに何も言ひませんでした。

すると、翌年の十月二十一日、それは、ちやうど八重垣様のお祭の濟んだ翌日でした。突然、佐太二郎の眼は開きました。眼は開きました。佐太二郎は、別段喜ぶ風もなく、四邊を見廻して「あゝ、あゝ」と長い溜息をつきました。しかし、佐太二郎は、そんな事には一向も關心なく、盲目のまま、突道湖畔をうたひ歩いたと云ふ話です。(出雲の話)



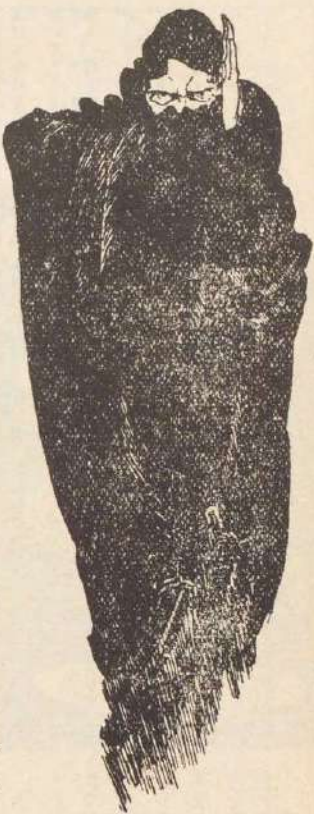
いはれてなりました。その日、佐太二郎は、大座村の八重垣神社に遊びに行つて、境内の小池のまはりを見渡すとなくうろつきまはつてなりました。

ふと見ますと、其處に、文鏡(昔の穴あき鏡で、表に文の字のある銅鏡)が一個落ちてなりました。佐太二郎は、それを拾ひ上げましたが、暫く考へてなつた末、おもしろい事に思ひつきました。

昔から、思ふ人を紙片に書き、その上に文鏡をのせて八重垣神社の池に浮ばせると、願ひ事の叶ふ印にはすぐと紙片が沈むといひ傳へられ、此際で、遠い國にある親兄弟姉妹にめぐり逢つたといふ、不思議な話が澤山に傳へられてなりました。それを、今、佐太二郎も試して見ようと思ひついたのでした。

しかし、はじめから用意した事ではなかつたので、佐太二郎は、おもしろ半分にお守袋から八重垣様の腰符を出し、それに文鏡をのせて、池の上へ浮べて見ました。すると、直ぐその願ひは、文鏡と共に沈んでしまつてしまつたのでございませぬ。

其後、佐太二郎の眼は、年に一過、十月二十一日になれば眼が明くといふ話ですが、其ほかの日は全くの盲目です。



# 王子の夢

水谷 勝

まだよほど間があるのかしらと思つて、その蠟燭を見たのでした。だつて、その蠟燭は、一晩か、つて、ちやうど燃え盡すやうに迫られてあつたのですもの。

蠟燭はまだ半分ぐらゐにしかなくつてゐませんでした。だから王子は、まだなか／＼夜が明けないうらうことを知りませんでした。なるほど、あたりはしいんと静まり返つてゐました。おも／＼しげに深い皺を刻んで、だらりと垂れ下つてゐる帳の外には、まつ黒な厚い夜の闇が、ひし／＼迫つてゐることもすぐに気がつきました。

王子はあゝよかつたと、一たんは思ひましたのですが、まだなか／＼朝にならないのだと思ふと、妙に心が騒いでなりません。びたりと鍵をかけて、固く閉め切つた部屋でありながら、この部屋がかなり頼みにならないものゝやうに思はれました。

王子は世からそつと頭をあげて、おつ／＼と部屋の中を見

王子は苦しい夢にうなされて、ほつかり眼を覺ました。そして、ふつくりした寢床の中に自分が寝てゐるのを見出し、あゝよかつたと思ひました。

でも王子は、すぐに部屋の片隅の方へ眼を向けました。そこには銀の蠟燭が置かれてありました。そして蠟燭の上には大きな蠟燭が形かにか燃えてゐました。王子は夜明けまでには

止まりました。けれど、別に寝も覺つたことには覺しはしませんでした。それで少しは安心をしました。

王子は今見た夢の中の人を、恐れてゐたのでした。その人は黒い衣を着てゐました。そして衣の外に出てゐるものは、顔でも手頭でも足頭でも、みんなまつ青でした。その人は低

いけれど鋭い聲で、こんなふうには話したのでした。

「王子よ。お前は考へたことがあるか。俺はそれが訊きたいのだ。お前は、この國の王様の息子として生れた。生れ落ちた時から、お前は多くの者に可愛がられて育つた。お前はみんなから崇められた。けれど、お前はほんとに自分がどんな人間であるか。それを考へたことがあるのか。みんながお前を敬ぶのは、お前が偉いからだと思つてゐるのか。俺はそれを訊きたいのだ。」

王子は何か鋭い針のやうなもので、胸を刺されるやうな気がしたのでした。そして、大へん苦しく思ひました。でも、その苦しさはその人が話を進めて行くにつれて、だん／＼ひどくなつて行きました。

「王子よ。お前は、この國の王様の息子だからやつぱり父の後

を繼いで、王様になつていゝと考へたら、それは大へんな間違だぞ。俺は夢の國から来たのだ。俺はいろんな人いろんな夢をやりに来るのだ。けれど、めちやくちやに、手當り次第に夢をやるわけではないのだ。ちやんと考へてやるのだ。心のきれいな人には、きれいな夢をやる。心のきたない人には、きたない夢をやる。また、いゝことをしてゐながら、世間の人に認められないやうな人には、楽しい慰めの夢をやる。それから、わるいことをしてゐながら、世間をごまかしてゐるやうな人には、苦しい懲らしめの夢をやる。」

そこまで聞いた時、王子は息もつけないうやうになつたのでした。その氣味のわるい青ざめた顔を、まともに見ることは出来ませんでした。でもその人は、なほも言葉を續けました。

「王子よ。お前は、この頃なにをしてゐる。よく考へてみろ。お前は早く自分のことを考へて、ちやんと心を入れ換へないと、俺は毎晩お前に、乞食になつて苦しむ夢をやるぞ。現にこの國のある町に、一人の乞食の子があるが、この子の心はきれいな子だ。俺はこの子に、毎晩王子になつた夢をやつてゐる。だからこの子は、毎晩楽しい眠を得てゐる。いづれこ

の子は、夢ばかりで王子になるところか、ほんとの王様になる筈だ。それにひきかへて、お前は今のやうだと、毎晩夕食になつた夢を見て、従つて苦しい眠を續けるために、ますます晝間はわるくなつて、遂には王様になることも出来なくなる筈だ。いゝか、よく考へてみる。俺は一度も嘘を云つたことはないんだ。」

さう云つて、にやりと不氣味に笑つたかと思ふと、その人はすうつとどこかへ消えてしまつたのでした。そして王子は



夢から覺めたのでした。

これが王子の夢なのでした。だから王子は夢から覺めはしたものの、その人がまたこの部屋に入つて來はしないかと恐れたのでした。かうして、たうとう朝まで、王子はその人を恐れたために、寝ることが出来ませんでした。

(二)

王子のために、夢の中のその人が云つたことは、ほんとののでせうか？

え、確かにほんとのことでした。この王子は大それた自慢屋で、意地わるで無慈悲で、亂暴で、我ま、で、手に負へない王子でした。けれど王様の一粒種でやがてはこの國の王様になる人でしたから、家來たちは何かにつけて、王子の氣に逆はないやうにしてゐた



のでした。

王子は夢から覺めた時に、その人を恐れる氣もしたのですが、さわやかな朝の光が部屋にさし込んで來ると、王子は

「あの夢を見るやうだといけないから、今夜は家來に劍を持たせて、俺の部屋に立たせておかう。もし、あの黒い衣を着た人が來たら、すぐに突き殺させることにしよう。」王子は大へんい、ことを、思ひついたものだ、自分ながら感心するのです。さつそく家來の一人を呼んで、そのこ

子はがばと寢床から跳ね起きて、大手を振つて宮殿の中を威張つて歩きました。そして、いつになく王子が早起きしたのにびつくりして、寢惚け眼をこすつてゐる家來たちを、面白

とを命令しました。

夜が来ました。そして、王子の寝る時刻となりました。家来はいかめしく身ごしらへをして、王子の部屋の隅に立ちました。手には劍を抜き放つて、しつかり握つてゐました。よく研がれてゐるその劍は、もの凄く青白く光つてゐました。王子はこの家来の姿を見て、頼もしい氣持がしました。そして、今夜からはもう大丈夫だと思ひながら、ふつくりした羽根蒲團の中に身を埋めました。すぐにも快い眼が訪れて来さうな氣がしました。

けれど、夜なかに、王子はまたうなされました。家来はあわて、王子の傍へ寄つて、

「王子さま、王子さま。」と、呼び起しました。

王子はおびえた眼を、ちつと家来の顔に向けたまゝ、でも不機嫌らしく云ひました。

「何故お前はあの黒い衣を着た人を、突き殺して呉れなかつたのだ。」

「私には其黒い衣を着た人といふのが、見えませんでした。」  
家来は黙つて云ひました。

前が飛んでしまふことを、家来たちはよく知つてゐたからでした。

### (三)

宮殿は美しくございました。金銀を惜し氣もなく使つたり寶石といふ寶石を鑲ばめたりして、眼も眩むほど飾りたて、ありました。踏めば五月の風の音のやうな、すがくしい音をたてる廊下もありました。また、眞珠を壁に塗り込んである立派な部屋もありました。

けれど、何となく血なまぐさい空気が、どこに行つても、どんよりとおもく沈んで、腐つて行くものゝ匂が、あたりに充ち／＼してゐました。

それもその筈です。王子の行儀は、あまりに酷たらしいものでした。こんな王子を住はせることを、宮殿は喜びませんでした。だから日が経つに従つて、金の柱は色かきまて行つたのでした。寶石の光澤もぬけて行つたのでした。けれど、王子はまだほんとに自分のことを考へませんでした。

九十九人目の家来を殺した日、宮殿のお膳所に一人の汚らしい乞食の子が来ました。そこにある老人の料理番が、憐れ

朝になりました。王子はまた我まゝなことばかり振舞ひました。その家来は、命令を守らなかつたといふわけで、王子の手で首を刎ねられました。

かうして毎晩、一人づつ劍を持つて家来が見張りに立ちましたが、王子はきまつて苦しい夢を見てうなされました。乞食になつて、廣い荒野をさまよつたり、黒い衣を着たその人に、ぶたれたりする夢ばかりでした。だから朝になると、きまつてその家来は、王子のために首を刎ねられました。

かうして、立派な強い家来たちが、九十九人死んでしまひました。そして死んで行つた家来たちは、誰一人として王子を恨まないものはありませんでした。首を刎ねたために、王子の劍は齒がこぼれてしまひました。でも王子は、自分のわるい心のことを考へませんでした。

王様も困つたことだとは思ひましたが、何しろ可愛い王子のすることですから、別に吐りもしませんでした。家来たちはびく／＼して、寄るとさはると、王子のことをわるく云ひました。けれど、王子の眼の前で、王子を誅めるものはありませんでした。認めでもして王子の御禮敷をそこねたら、すぐんで御禮敷の疑りをやりました。乞食の子は黙つてお膳所へお膳所の片隅でそれを食べました。

するとそこへ、運わるく王子が通りかゝつて、さつそく料理番をとがめました。

「何だつてお前は、そんな汚い乞食の子に、ものを食べさせるのだ。そんな汚い奴は、一步も宮殿の中へ入れてはいけなことを、お前はよく知つてゐる筈ぢやないか。」

王子はぶん／＼怒つて叱りました。この頃の王子と云つたら、何しろ九十九夜の間、苦しい夢ばかり見てゐるので、顔は青きめて頬骨は高く飛び出すし、口は尖つてゐるといふ有様でした。それにひきかへて、この乞食の子は、着てゐる着物こそ汚らしいのですが、顔は神々しいほど美しいのでした。もしも王子の服をこの乞食に着せ、この乞食の子の着物を王子に着せたら、めい／＼よく似合ひさうに思はれました。

料理番は王子に叱られたものゝ、御馳走を食べ終らせないこの乞食の子を、追ひ返すのが可哀さうでならなかつたので、頭を下けて黙つてをりました。

「ははあ、お前は始終この宮殿へ忍び込んで来るのだな。そ

れでこの頃、宮殿の中がどうも異気は異つて、腐い匂がしたり、いやに汚くなつてしまつたのだな。王子は乞食の子を睨みつけて、さう云ひました。

「王子さま、お許し下さいませ。私は今日はじめ、ついでここへ参つたのございませ。實は私は毎晩自分が王子になつた夢を見るのでございませ。それだものですから、ついでつかり、貴殿の宮殿へ



ふらふらと来てしまつたやうなわけでございます。どうぞ、お許し下さいませ。」

「乞食の子は、忍る／＼申しました。『馬鹿め、夜と晝とは異ふぞ。』と、王子は威丈高になつて云ひましたが、乞食の子の云つた言葉に、すきんと胸を刺されるやうな気がしました。そして、夢の中に出て来た、黒い衣を着た人の云つた言葉が、今更のやうに恐しく、思ひ返されました。

その時でした。きれいな羅布のながい着物を着た七人の腰元が、

「王子さま、王子さま。」と云ひながら、王子を探しに來ました。

「まあ、王子さま。こんなお臺所にいらしつて！ 父君さまがお待ちかねでございます。」

「一人の腰元は、びつくりして叫びました。續いてもう一人の腰元は、もつとびつくりして、頓狂な聲を出して叫びました。

「まあ、王子さま。あなたさまが、今日限りちゃんと御改心

なすつたことは、誰もうたぐつたりいたしはしません。それになあ、きつとあなたさまは、今までのことを考へると、自分ほ乞食の着物を着るのにふさはしいといふお考から、そんな汚い乞食の着物をお召し逆はすのでせうが、さうまでなさらなくても、もう御改心のことは、ちやんと解つてをります。急に御立派なお顔になつたことでも解ります。ほんとに、私たちもどんなに喜んでをりますことせう。さあ早く父君さまのところへまゐりませう。父君さまは、さつきから私たちに一刻も早く連れて來いと仰せられていらつしやるのです。」

王子は腰元たちが、何を馬鹿なことを云ふのかと思つて、腹立たしさうに、

「馬鹿つ！ 汚い乞食の着物なんか着てやしないぢやないか！」

と、嗚りつけました。

けれど、腰元たちは、

「だまされはしないよ。さつさとお歸り。」と、てん／＼に罵りながらほんとの王子には眼もくれず、却つて乞食の子の方へ近づいて行きました。そして、



「ほんとに勿體ない。王子さまあまりではございませんか。」

と云ひながら、乞食の子の着物を脱がせて、七人で抱へるやうにしてお湯殿へ連れて行きました。そして、香水を入れて沸したお風呂で、きれいに身體を洗つてしまひました。

料理番はあつけらかんとして、この騒ぎを見てゐました。

王子は齒ぎりをして、料理番に向つて、自分がほんとの王子であることを、證據だて、呉れと云ひましたが、よく見ても、よく見ても、どうも王子のやうには思へなかつたので料理番は承知しませんでした。だから王子は氣が狂つたやうに泣いたり叫んだりしました。

乞食の子は、お風呂から出ると、腰元たちに世話されて、立派な服を着てしまひました。

「父君さまは、あなたさまの御改心を、たいへん喜んでいらつしやいます。すぐに父君さまのところへまゐりませう。」

一人の腰元は嬉しさに云つて、立派な姿になつた乞食の子を導いて行きました。他の腰元たちも、暗い淋しい冬が去つて、暖かい新しい春が来たやうに、嬉しさを顔に、一そら

輝かせてゐました。

腰元たちは、改心したが故に、王子はこんなに美しく可愛くなつたものと思ひ込んでゐました。

乞食の子は、ちやうど毎晩見てゐた夢のやうな氣がしてゐましたから、たゞよろこんで腰元の云ふまゝになつてゐたのでした。

王様は大そうなお喜びでした。今は立派な姿になつた乞食の子をやはり王子と思ひ込んで、

「やつぱり心をあらためると、たちまち立派になるものぢやな。」

と云つて、にこ／＼していらつしやいました。

「ほんとに今日は嬉しかつた。わしはお前のことを心配してさつきお前の部屋に行つてみたのだ。すると、私は今日から改心して立派な王子となるといふことを、こま／＼と書いた紙きれが、お前の机の上に載つてゐるではないか。それを見た時のわしの喜びを察して呉れ。急に心が軽くなつたやうな氣がした。急に眼の前が明るくなつたやうな氣もした。」

ました。

王様は、長い間の御心配がなくなつたせゐだつたでせう、ふいにその夜お亡くなりになりました。

悲しい日が來ましたが、家來たちは、王子の心があらたまつたことを知つてゐるので悲しい中にも諦めることが出來ました。

一方、宮殿から狂ひ出たほんとの王子は、どこへ行つたのか、どうしたのか、ちつとも行方はわかりませんでした。

最後にたつた一つ書いておかなければならぬことは、乞食の子が王子にされてしまつたその日の朝、王子の部屋に黒い衣を着た人が書き置いた顔をして坐つて、何かこま／＼と紙に書きつけてゐたことです。その書いた字は、王子の字と少しも異つてゐませんでした。そして、書き終つてから、宮殿の柱の蔭に隠れてゐて、乞食の子がすつかり王子にされてしまつたのを見て、安心したやうな顔をして、どつかへ行つてしまつたことです。

けれど、この黒い衣を着た人を、宮殿のものは誰一人として氣つきませんでした。(をばり)



この王子は、言葉すくなく答へました。

王子が改心してから——(宮殿の中にある人は誰一人として、この王子が乞食の子だとは思ひませんでした)——宮殿は昔の通りに華やかになりました。

王子が通ると、金銀や寶石が、にはかにきら／＼とか／＼やきました。そして、宮殿の中によどんでゐた不愉快な重くらしい空氣やにほひも、すつかりどこかへ消えて行つてしまひ

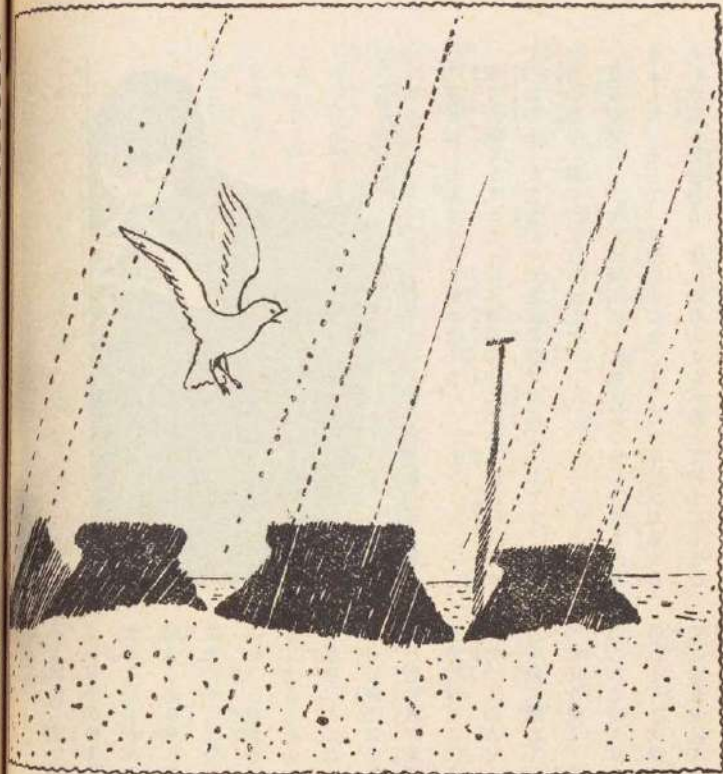


唄のお國の  
 青空も  
 知らずに生れた  
 籠の鳥  
 姉さんお家が  
 知りたくば  
 お馬の足あと  
 踏んでゆけ

籠の鳥

(推馬童話)

狩野鐘太郎



雨コンコ  
 啼くに  
 海どり  
 啼くに  
 お屋根で  
 啼くに  
 傘一本  
 お出し

雨の鳥

(推馬童話)

達崎龍一



世界童話名作物語(その一)

母を尋ねて

三千里(イタリヤ)

三宅房子

イタリアの西部海岸のセノアの町から三千里の遠く、

ある家の御主人と自分の従兄弟とにあて、二度まで問合せの手紙を出しましたが、何の返事もありませんでした。そこで、仕方なくアルセンチンの伊太利領事館あてに捜索願ひを出しました。三月たつてから、やつと領事館から返事が来ましたが、それには、

「新聞に廣告までして見たが、誰も申出る者が無い」と書いてありました。そのまゝ幾月かたちました。しかし、お母さんからは何の便りもありませんでした。家中の者がはつきりしてゐましたが、とりわけマルコーは泣いてしまひました。そこで、お父さんは自分で南アメリカまで行つて捜して来ようかと思ひましたが、それでは後に残つた二人の子供を世話する者がありません。また、長男の子もこの頃では自分でお金をかせぐやうになつた所ですから、家のためにはなくてはならない人です。そんな譯で無駄に日を送つてゐますと、あ

がたつた一人で、お母さんを尋ねて行つたといふ水鏡にあつた可哀さうなお話があります。少年の名はマルコーといひました。マルコーの家はもとほ裕福に暮してゐたのですが、後から／＼つゞいた不仕合せのために、すっかり貧乏になつてしまひました。それでマルコーのお母さんは、女ながらもどうかしてお金を儲けて、家中の者を仕合せにしたといふ考へて、南アメリカのアルセンチンといふ國の都へ行つて、お金持ちの家へ奉養に行くことになりました。その頃、南アメリカは國が開けたばかりなので、ヨーロッパから行つてゐる人は極く僅かでしたから、そこへ行つて働けば男でも女でも、幾くほど澤山のお金がとれました。ですから、五六年も辛抱してゐると、一と財産出来るといふので、するぶんだ勢の人が出かけて行つたのです。マルコーのお母さんは、氣のしつかりした人でしたから、そんな遠方の國へ出かせぎに行くことを何とも思つてゐませんでした。でも、二人の子供は子供に別れることは何れも避けられぬもので、お母さんがいかに願つたやうに、お父さんと、私をお母さんを探して来ます」といひ出しました。その機子が、いかにも深く思込んでゐるやうなので、お父さんは可哀さうに思つて涙をこぼしました。まだやつと、十三になつたばかりの少年がたつた一人で、どうしてそんな遠い國へ旅をする事が出来るでせうか。けれども、マルコーはどうしても行くといつてきまませんでした。

「僕は一人ぼつちだつて、船に乗りさへすれば着くんでせう。着いたらアルセンチンのお父さんの家を探します。伊太利の人も澤山あるといふから、僕が伊太利の子供だとわかれれば、きつと親切に教へてくれます。小父さんの家へ見つかれば、お母さんにあへるのです。もし、小父さんの家が見つからなかつたら領事館へ行きます。さうして、お母さんの奉養してゐる家を探してもらひます。その中にはお金がなく困ることがあるでせうが、そしたら仕事をしてお金を儲けます。僕

「おとなしくして、お父さんのいふことをきくのですよ。母さんは直き澤山お金を儲けて歸つて来るからネ。」

といつて、弟のマルコーの頭をなでながら涙をこぼしました。別れる時、兄の方の子供は十八で、弟は十一でした。

さてお母さんは、無事にアルセンチンの都に着きました。丁度そこには、お父さんの従兄弟にあたる人があつたので、その人を便つて、お金持ちの家へ奉養する事になりました。それから後、お母さんは時々の暇に目をみはさつとみんなに個りをよこしました。また三月ごとには、ためたお給金を送つてよこしました。お父さんは正直な人でしたから、その度に涙をこぼして喜んで、送つて来たお金の内を少しづつ借金の方へ返して、だん／＼と昔の名譽をとりかへすやうになりました。

しかしお母さんのゐなくなつてからの家中は本當に淋しいものでした。殊に弟のマルコーはお母さんを戀しがつて、氣の抜けたやうな顔をしてゐるので、お父さんはそれを見かねて、一晩か二晩かお母さんを探して

「マルコーは年の割合にしつかりした分別もあるし、勇氣もある。長い間の貧乏で不自由と艱難にはなれてゐる。それにお母さんを一心に慕つてゐるから、その心に勵まされてお母さんを探し出すかも知れない。」

さう思つて、お父さんはお友達に船長をしてゐる人があるで、その人の處へ行つてこの話をしました。

すると、船長は大へんに感心して、マルコーのために無料の三等切符を一枚くれました。

二

マルコーがいよいよアメリカ通ひの汽船に乗り込んだのは、四月の美しい夕方でした。お父さんと兄さんが、船まで送つて来ました。お父さんは目に一ぱい涙をためて、マルコーにお別れのキッスをしました。「マルコー、どんな事があつても氣を落してはいけません。お前はこれから立派なことを

しに行くのだから。神様がきつとお助け下さるに違ひないよ。」

お父さんはかういつて歸つて行きました。あゝ可哀さうなマルコー。この子はどんな事に出あつても、決して勇気をなくすことはいないでせう。けれども、生れた町から一と足だつて外へ出たことのない者が、廣い海の上へたつた一人とり殘されたのですからどんなに心細かつた事であらう。

もう住みなれたゼノアの町も饑の中に消えてしまひました。目にうつるものは、大きな夕日と青い海ばかりでした。

船に乗つてから二日ばかりの間は、食物もろくろく、咽喉を通りませんでした。マルコーは甲板の隅の方に小犬のやうにうづくまつて悲しさにしてゐました。船には誰一人知つた顔の者はあません。甲板の上には、アメリカへ出かせぎに行かうといふ荒くれ男がごろごろしてゐました。

マルコーは時々、  
「お母さんは死んでしまつたのぢやないかしら。」  
とつぶやいてゐました。



「大丈夫だ！ お母さんにはきつと遇へるよ。」といつて、ばげましてくれたりしました。

マルコーは強に上ると、先づ最初にお父さんの従兄弟にあたる人の住んでゐるロス・アスタルといふ町を探しました。お母さんの居處はこの小父さんにきけば分ると思つたからです。

町は果しがない程ながく續いてゐました。次から次へと町の名を讀んで歩きましたが、

うそだ、そんな事があるものか。」と思つて、無理に安心しようとしてゐました。そんな風で夢にまでお母さんの死顔を見たりして、冷たい汗をびつしりかくやうな事がありました。

船はシアラタル海峡を出て、ひろくした大西洋へ出ました。それから、毎日々々退屈な航海がつゞきました。熱帯の氣味の悪いやうな海を通ることもありました。また、雨ばかり降りつゞいたので病人が澤山出来て狭い船室の中では陰聲や子供の泣聲ばかりして、耳について眠れない事もありました。マルコーはそんな時には、自分は身體ごと腐つて死んでしまふのぢやないかと思ひました。

マルコーは一年の餘も船に乗つてゐるやうな氣がしました。それでもゼノアの港を出てから二十七日めに、船は無事に南アメリカのアルゼンチンの都に着きました。

その日は、バラ色をした五月の美しい朝でした。この航海中が一番いい日だつたと思はれる位いゝお天気の日でしたから、マルコーは嬉しくてたまらなくなつてゐました。彼は船までお母さんを探して見たいと思つてゐました。

町を離れてある名の町へ出ませんでした。

マルコーは女の人さへ見れば、お母さんではないかと思つて、目をキョロキョロさせました。

した。お母さんに後姿がよく似た女の人が行くので夢中になつて追かけて行くと、それは似もつかぬ黒ん坊の女であつたりしました。

そのうち、やうやくの事にロス・アスタルと書いてある町の角へ來ました。

マルコーは胸をわくわくさせながらやつと思ひで、小父さんのある家を探してました。その家は小さな小間物屋の店でした。マルコーがいきなり入つて行くと、髪色の白い、眼鏡をかけた女の人がそこに立つてゐました。

なり自分を抱きしめてくれるやうに思つたりしました。

「ずるぶん長い航海でしたが、着てしまへば何もかも夢のやうに忘れてしまつて、遠いアメリカまでたつた一人であつたといふ得意な心で一ぱいでした。」

マルコーはこの時お金といつては一つの袋の中に五六圓しか残つてゐませんでした。無くすといけないと思つて、二つに分けて置いたのの一つの方を船の中で盗まれてしまつたのです。しかし、マルコーにはそんな事はなんでもありませんでした。

「向うへ着きさへすれば、お母さんに遇へるんだ。」  
さう思つて、小籠りしながら船を降りて行きました。

はしげが波止場に着いた時、マルコーは航海の間になつた一人おなじみになつた百姓のお爺さんと別れの挨拶をしました。このお爺さんはアメリカへ出かせぎに行つてゐる息子を尋ねて行くのでした。親で正直なお爺さんで、マルコーの話を聞くと、氣の毒が

「お母さんを探して見たいと思つてゐましたよ。」  
と、お上さんが答へました。

マルコーは、いきなり蘭天を捧でなぐられたやうな氣がして倒れさうになりました。  
「いつ死んだのです。いつ死んだのです。」  
「二三ヶ月前ださうですよ。商賣が巧く行かなかつたので、こゝを止めて遠くの方の町へ行つたさうですが、そこで死んだといふ話です。」

マルコーはがつかりして眞背になつてしまひました。そして、ハア／＼溜息をつきな

「こゝにあつた小父さんより外には、僕の母さんの居處を知つた人はいないのです。母さんはメキネーさんといふ人の家に奉行してゐたんです。僕は母さんを尋ねてアメリカへ來たのです。僕はどうしても母さんを探さなければならぬのです。」  
マルコーが夢中でいつてゐるので、お上さんは大へん氣の毒に思ひました。幸ひ近所に

マルコーのお母さんの奉行してゐた家へ手紙を持って行つて知つてゐるといふ子供があるので、その家までマルコーを案内してくれました。

マルコーはその子供につられて、長い長い町を通り過ぎました。すると、きれいな湖の門のある家がありました。その家の支障に立つて案内を求めると、中から一人の女の人が出て来ましたが、

「メキネーさんのお家はこちらですか。」と、ききました。

「ええ、この間まで此方にあつたのですが……」

といつて、女の人はマルコーの顔を見たのでマルコーは思はず目の色を變へました。

「ちやア、メキネーさんは何處へ行つたのです。」マルコーは泣きさうな聲になりました。

「マルコーは泣きさうな聲になりました。」

「ええ、マルコーですつて……」マルコーは夢中で叫びました。「マルコーですつて……」

そして、奉行してゐた人はどうしたもので、それは女です。女の母さんなんです。その女は、

マルコーは家まで行って、人とひととを町をさして歩いて行きました。マルコーは熱病やみのやうになつて、ふらふらとボカの町につきました。その晩は、宿屋の門番のところで夜をあかしました。その次の日は、川岸の村木の上に腰をかけて、小舟や曳船やボートを見ながら一日中華しました。そして、その夕方、やつと果物を澤山つんでロザリオの町に向ふ帆船に乗込みました。その船には日にやけた丈夫さうな伊太利人の水夫がゐるので、マルコーはやつと元氣が来ました。

三日と四晩の間、海のやうに廣々とした河の上を船はのろりと進んで行きました。マルコーは夜になると、甲板の上に出て寝ました。時々いやな夢を見て、はつと目を覺したりしました。すると、いつも青い月が頭の上で照つてゐました。

「マルコーは心の中できり返していひました。と、何だかお伽話の中で聞いた不思議な町のやうな氣がして來ました。母さんもこの川を舟で行つたのだな。あの

う聲も出なくなりました。『まア仕方がない。兎に角家へお入り、ゆつくり相談をしてあげるからネ。』

紳士はやさしくいつてくれました。

紳士はマルコーを奥の間に通して精しい話をききました。それから暫く考へておきました。

そして、これからどうしたらいいか、いろいろと親切に教へてくれました。

その方法といふのは、紳士が書いてくれた手紙を持って二日ばかり先きのボカといふ町へ行つて宛名の人を訪れるのです。すると、

その人がまたその先きのロザリオといふ町の知人にあつて、手紙を書いてくれるのです。そこで、その人がマルコーまで行ける方法を何とか考へてくれるだらうといふのでした。

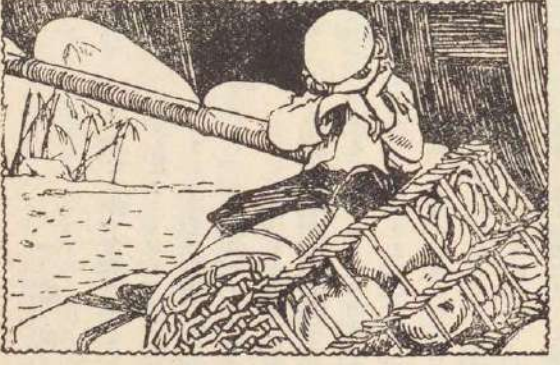
これだけの事を教へた後で、紳士はマルコーにいくらかのお金をくれました。

「元氣よく行つておいで。どこへ行つても伊太利の人はゐるからネ。心細い事は少しもな

いよ。」

「有難う。」マルコーはしつぱり腹でかい

船や別々の舟は船の影のなかりやうな、さう思つて黒黒の景色を見ると、激しくうたへてゐました。水夫の一人が舷で頭をうたつてゐました。その頭を聞いてみると、幼い時



「どうしたのだ、どうしたのだ。しつかりしろよ。セノアの男は國から遠く離れたといつて泣くものぢやない。海のセノア人はみんな元氣よく、大威張りで、世界中を版にかけて歩いてゐるぢやないか。」

この言葉を聞いたマルコーは、身中の血がかつと沸上るやうに思ひました。

「さうだ、たつこの先何年か、何十年か、たつこの世界中を何千里歩かなければならぬ事があつても、きつと母さんを尋ね出して見せるぞ。へとへとに疲れて死ねばかりになるまでは、きつと殊れて歩くぞ。母さんの足もとにぶつ倒れて死んでもいい。一度でも迷はないうちはどうしたつて止めないぞ。」

マルコーは晴れんとした元氣で、ロザリオの町に着きました。ロザリオの町は高い岸の上にある町で、港には方々の旗が何百といふほど朝風にひるがへつてゐました。(つづく)



# 日御の子

(九のそ話神本日)

## 楠山正雄

神代の昔、日本の天子さまの御先祖の神さまが、あの高い大空の國からはるく、お下りになったお話です。

さて經津主命と建御雷命お二方の強い神さまたちのお骨折で、永らく日本の國の王さまであつた大主命の一門は退き、天照大神の御子たちが代つてその國を治めることになりましたので、大神のお子の正勝吾勝勝速日天忍穗耳命がいよく、下界へお下りになる筈でした。するとちやうどその時分命のお子の彦火々瓊々杵命がお生れになったので、お父さまの代りにこの命がお下りになることになりました。

そこで瓊々杵命がいよく、大神はじめ高天原の神たちにお暇乞をしてお出かけにならうといふ時に、ちやうど天と地との間のお通路の四辻に當るところに立つて、上は高天原までまぶしく光を射上げ、下は日本の國中をあかくとらしてゐるふしぎな神さまがありました。

その光がいかに強いので、さすがに高天原の神さまたちも眼を射られて、まともに向ふことができません。そこで天照大神は天鈿女命をお呼びになつて、

「お出せぬ悪い神だから、あの淵を對いでゐる神の原へ行つて、日の御子がこれから下らうといふ道傍に立ちはだかつて邪魔をしてゐるお前は誰だといつて聞いて御出で。」とお言付になりました。

鈿女命はさつそく出かけて行つて、大神の仰せを言葉きびしく傳へました。するとその光る神はさも畏れ入つたといふやうに、

「いやはや、お邪魔をするなどとはとんでもないことでございます。わたくしは國の神籙田彦といふものでござりますが、日の御子がお下りになるとうけたまはり、お道筋の御案内を申上けたためわざく、お迎へにまゐつたのでございます。」と申しました。

そこで日の御子のお供揃がでさ上がつて、いよく空からお下りになることになりました。

お供の中で頭だつた神さまは、天兒屋根命、太玉命、天鈿女命、石凝姥命、玉祖命と都合五人の神たちです。

それから昔、天照大神が天の岩戸におかくれになつた時作つた八尺の勾玉と、八咫鏡、それに素戔雄命が八岐の大蛇を

## 一、籙田彦

「お出せぬ悪い神だから、あの淵を對いでゐる神の原へ行つて、日の御子がこれから下らうといふ道傍に立ちはだかつて邪魔をしてゐるお前は誰だといつて聞いて御出で。」とお言付になりました。

鈿女命はさつそく出かけて行つて、大神の仰せを言葉きびしく傳へました。するとその光る神はさも畏れ入つたといふやうに、

「いやはや、お邪魔をするなどとはとんでもないことでございます。わたくしは國の神籙田彦といふものでござりますが、日の御子がお下りになるとうけたまはり、お道筋の御案内を申上けたためわざく、お迎へにまゐつたのでございます。」と申しました。

そこで日の御子のお供揃がでさ上がつて、いよく空からお下りになることになりました。



てらして案内してくれた猿田彦の命は、御用がすむとやはり御女命にいひ付けて、伊勢の國にお送りになりました。ところがその後でこの猿田彦は、或日伊勢の國の浦に出て釣をしてゐますと、ひらぶ貝といふ貝に手をはさまれて、そのまゝするく水にはまつて死んでしまつたといふことです。また御女命は、猿田彦を送りかへして後、日向の國へ歸つて來ますと、大小さまのお魚をのこらす海はたへ呼びよせて、

「これく魚ども、お前たちはこれから永く日の御子の御家來になれ。」と申しますと、

魚どもはのこらず、

「へいへい、かしこまりました。」と御返事を申上げました。

ところがその中にたゞ一つ、海鼠だけが黙つて何も言ひません。命は女神でも氣の荒い狛狛持の神さまでですから、いきなり懐劍を抜いて、

「これ、この口は返事の口の利けぬ口か」といひながら、海鼠の口を切りさいしてしまいました。おかげで海鼠の口は今でも大きく裂けてゐるのです。

二、もろい花

瓊々杵命はそれから、高千穂峯を下りて平地へ出て、だんだんにお住居をさがしく日向の國の笠沙の岬の海ばたにお出でになりました。その時御子は、

「こゝは朝日はまとも刺し、夕日もあかくと照つてよい國だ。こゝに國を作つて住まう。」と仰しやつて、そこへお宮をお建てになりました。

さて瓊々杵命は、笠沙の岬のお宮にお住ひになつて、日本の國を治めてお出でになりましたが、或日のこと、海ばたを歩いてお出でになりますと、一人のそれは美しいお姫さまにお出合ひになりました。

「あなたはどなたです。」といつて、御子がやさしくおたづねになりますと、

「わたくしは山の神大山祇神のむすめで、木花開耶媛と申すものでございます。」とお姫さまはお答へ申しました。

命はなほ、

「あなたには兄妹があるの。」とおきゝになりますと、

「はい姉が一人、石長媛と申します。」と答へました。

御子は太へんこのお姫さまがお氣に入つたので、

「あなたをお嫁にもらひたい。」と仰しやいました。

すると木花開耶媛は、

「わたくしには分かりませんから、どうぞ父におきゝ下さいまし。」と言ひました。



そこで御子はあらためて大山祇神に、お社の神をくれぬいとが言つておやりになりますと、大山祇神は大そう喜んで、早速承知いたしました。そして御結納のお祝物の外に、姉の石長媛までつけて木花開耶媛を御子のお宮に差上げました。ところが妹とちがつて、姉さまの石長媛は大へん不きりやうなこはい顔をした女の人でしたから、命はおきらひになつて、妹、媛だけ止めて姉をおさまお返しになりました。

大山祇神は御子が姉の石長媛をおかへしになつたものですから、大そう恥づかしく思ひ、命に向つてお怒みの言葉を申上げました。

「姉と妹と二人むすめを差上げましたわけは、石長媛をもお召使ひにおなりになれば、御子のお命はもとより、この後

お生れになる天神の御子孫は、雨にうたれても、風にさらされても、いつも變らない岩のやうに、いつまでも丈夫に末長くとお祝ひ申上げたのです。その上に木花開耶媛を差上げ、御子の御連が木の花の咲くやうにお榮え遊ばすやうにと深い心をこめたのです。それをあいにく石長鏡をお返しになつて、木花開耶媛だけをお止めになりましたから、あなたのお壽命も御子たちのお壽命も、木の花のやうにもろくはかないこととせう。」

かう大山祇神は言つて残念がつてをりました。なるほどその言葉の通り、下界へ下つてからは天神の御子孫の御壽命も昔のやうに長くはつきりませんでした。

さて笠沙のお宮におのこりになつた木花開耶媛は、日の御子のお妃になつて一日立ちますと、命のお子をお生みするやうになりました。

命はあまり早いのでふしぎにお思ひになつて、

「たつた一日で子供が生れるわけはないから、これはきつと外の神の子にちがひない。」  
と駭つておいでになりました。



### 海幸山幸 (日本神話)

#### 一、海のお宮

瓊々杵命の二人のお子様のうち、お兄さまの火閻降命は毎日毎日海へ出て漁をなさ

すると木花開耶媛は、口惜しさうに涙をばらばらとおこほしになりながら、

「では若しわたくしのお生みするお子が天神のお子でございませんでしたらきつと榮りがありませう。」

かう言つて、お産をする小家をわざと、出口も入口もない小家にこしらへ、中に入ると、すぐ外から土で隙間といふ隙間をすつかり塗り塞がせてまるで息も通ふ道もない位にし、いよくお子を産む時に、その小家に火をつけてお焼かせになりました。

しかしお妃の言葉にたがはず、お生れになつたお子にも、お母君の媛にも何のつゝがもなく、火の中から無事に出ておいでになりました。それで産屋に火がついて一ばんひどくもえさかつた時にお生れになつたのが、火閻降命で、産家がやけ落ちる時にお生れになつたのが火折命又の名を天津日高彦火火出見命と申上る方です。

これでお妃の清らかなお心がよく分かつたので、瓊々杵命は前より一層お妃を可愛くお思召して、いつまでもくく仲よくおくらしになりました。

るのが程よりお上手で、どんなに海のしげる時でも、いろいろと、大きい魚や小さい魚を、澤山に釣つてお歸りになりますので、海幸彦といふ綽名がついてをりました。これは海の運を持つた男といふことです。

弟さまの火折命は、毎日毎日山へ入つて獵をなさるのが何よりもお上手で、どんなに山の荒れた時でも、いろいろと大きい獣や小さい獣を、澤山に捕つてお歸りになりますので、山幸彦といふ綽名がついてをりました。これは山の運を持つた男といふことです。

けれども人といふものは、しじゅう一つ事ばかりしてゐると飽きるものですから、お兄さまはお兄さまで、

「毎日海へ出て釣竿を相手に浮子と睨めつくらばかりしてゐるのも気がくさ／＼する。たまには、弟のやうに山の中へ自由にお遊びまはして見たらどんなに面白からう。」とお考へになりますと、弟さまは弟さまで、

「毎日重たい弓矢を背負つて山坂を上つたり下りたりするのにつく／＼くたばれる。たまにはお兄さまのやうに一日じつとして坐つたま／＼とした海でもながめてゐたら、き



そのんきでいいだらう。」と獨言を仰しやいました。

それで誰いひ出すとなく、

「お互ひに一ばん道具をかへて、いつも山へ行く人は海へ行き、海へ行く人は山へ行ってめい／＼運だめしをして見ようぢやないか。」と、かういふ御相談ができ上がつて、お兄さまは弟さまの弓矢を背負つて山の方へ、弟さまはお兄さまの釣竿を擔いで海の方へ、てん／＼に得意さうな顔付をしてお出かけになりました。

ところが、馴れないことといふものは爲方の無いもので、弟さまは寒い海ばたに坐つて、一日釣竿の動くのを楽しみにして待つてお出でになりましたが、雑魚一匹かからないうちに、もう日はとつぷりと暮れてしまひました。爲方がないから、歸らうとお思ひになつて、釣竿をお揚げになりますと、お兄さまから拜借した釣針は、いつの間にか魚に持つて行かれてしまひました。

弟さまはど／＼いつてお兄さまにおわびをしようかと、ほんやり考へながらお歸りになりますと、これも獲物が一つも無いので、ぶん／＼變りながら、お兄さまが山から歸つてお出



でになりました。お兄さまは、「山の運は山の運。海の運は海の運。もう取りかへつこは、懲り／＼だ。」と仰やつて、釣道具をすぐかへしてくれとお急ぎ立てになりました。弟さまは、「大變申わけのないことですが、その針はとう／＼一匹も魚を捕らないうちに失くしてしまひました。」とかう言つて、せつせとおわびなさいました。するとお兄さまはますますお怒りになつて、せひその針をさがして來いと言つて、おわび言をおき／＼入れになります。



「針がありませんから、弟さまは腰にさけておいでになる長い劍を細かく碎いて、それで釣針を五百本こしらへて、それを代りにお上げになりました。けれどもお兄さまは何でもとの針でなければ駄目と言つて、お取りになりません。弟さまはまた千本の針をこしらへて、策の中へ山のやうに積み上げてどうぞこれで勘辨して下さいと言つて、お頼みになりました。お兄さまはやはり頭

をふつて、「千本、萬本新しい針を積み上げて、もとの針でなければだめだ。」と意地のわるいことを仰いました。

弟さまは困つておしまひになりまして、ほんやり海はたへ出て、おい／＼泣いてお出でになりました。さうするとこそへ鹽土の翁といふ神さまが出て來て、「もし／＼何を泣いていらつしやるのです。」と聞きました。

「わたしはお兄さまの釣針を借りて、海の中へ失くしてしまひました。それで代りに澤山釣針をこしらへて上げたのですけれどもお兄さまはどうしてももとの針を返せと言つて、お聞きにならないのです。」

鹽土の翁はわけを聞いて、大へんお氣の毒に思ひまして、「ではわたしがいいやうに爲て上げますから、もうお泣きなさいませぬ。」と言ひながら、髪に挿した黒い櫛を砂の上へ投けますと、大きな竹林がそこにできました。翁はその竹を切つて、目無し籠といつて、目の細かい籠を三つ合せたやうな、何處からも水の這入らない潜水瓶のやうな舟をこしらへて、

その中へ火折命を乗せました。

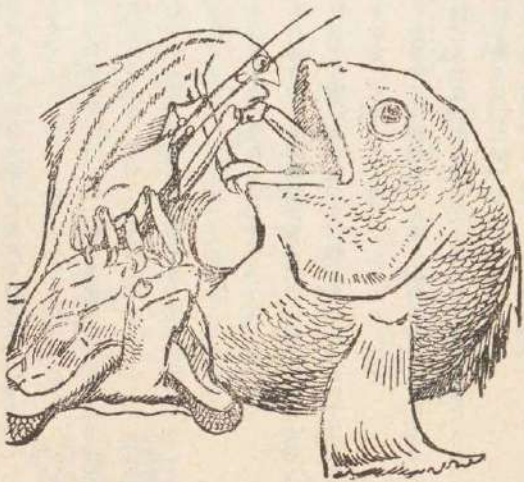
「それでは此のまゝ眞直に海の底までお出でなさい。しばらくすると波が二つに分かれて綺麗な濱邊へ出ますから、そこで舟を下りて、その道を何處までもいらつしやい。やがて金銀や瑠璃瑪瑙で造つた澤山の棟が、魚の鱗のやうにたくさん並んだ、大きなお宮へお着きになります。これは海の神さまのお宮です。

そのお宮の門のわきに井戸があります。その井戸の側によく繁つた柱の木がありますから、その木の上によがって待つていらつしやいませし、海の神の娘が出て来て、取次いでくれます。」

かう鹽土の翁は言つて、舟を押し流しました。

命はしばらく波のまゝに流れてお行きになりますと、ほんたうに鹽土の翁の言つたやうに、波が二つに分かれて、綺麗な砂路の上に出ました。その路をどこまでも眞直についてお出でになりますと、やがて大きなお宮が見えてまゐりました。命はそのお宮へお着きになつて、門のそばの柱の木によがつてお出でになりました。

八咫重ねて撃き、その上に鞭の轡を八咫重ねて、針をその上にお据ゑ申して、いろ／＼の御馳走を影しく並べてねんころなおもてなしをしました。そして豊玉媛をお嫁さまに差上げ



七〇  
しばらくすると、お宮の門が開いて、一人の美しい娘が玉の器を持って、その井戸へ水を汲みに來ました。此の娘が海の神の娘の豊玉媛でした。

樹の上に人がゐようとは知りませんが、豊玉媛は何氣なく井戸の中をのぞいて水を汲上げようとしますと、きら／＼と水の面が光つて人の影がさしました。びつくりして上を見ますと、柱の木の上に綺麗な男の人がをりました。

媛はその時「おや」と叫んだまゝ、玉の器を思はず井戸の上に落とすと、微塵に砕けてしまひました。

媛はそれには構はず、すぐにお父さまの海の神のところへ行つて、

「門口にそれは／＼綺麗な方が來て入らつしやいます。」といひました。

海の神は門口へ出て見て、

「おや、あの方は、高天原からお下りなつた瓊々杵命さまの御子さまだ。どうしてこんなところにお出でになつたのだらう。」と言つて、すぐにお宮へお通し申し上げました。海の神はそれから豊玉媛といふ海の神の娘をこしらへた豊玉媛

ました。

命はそのまゝ媛と一しよに海の神のお宮にお住ひになりました。そのうちに、いつか三年といふ月日が立ちました。

## 二、満潮の珠干潮の珠

その間、命は海のお宮のめづらしさに紛れて、釣針のことをすっかり忘れておいでになりましたが、ふと或日三年前のことをお思ひ出しになりました。

「どんなにお見さまは怒つて入らつしやるだらう。どうしたつて此のまゝでは歸れやしない。」とお迷ひになりながら、さう思ひ出すと、國のことが戀ひしくなつて、思はず深い溜息をおつきになりました。

豊玉媛はその御様子を見て、大層心配して、お父さまの海の神に相談いたしました。海の神は

「それはきつと命は久しくお國へお歸りにならないので、思ひ出して戀しくおなりになつたのかも知れない。それとも外にわけがあるかもしれない。一たいどうしてこんな海の中へお出でになつたのだから、それを伺つて見よう。」と言つて、命

の所へ来て、お尋ね申しました。  
命はその時釣針を探しに来たわけをすつかりお話しになりました。

このお話を聞くと、海の神は早速大小にか、はらす海の中の魚といふ魚を一匹のこらす寄せ集めて、  
「此の中に誰か命の針をお取りしたものはるないか。」と尋ねました。

さうすると、魚たちは口をそろへて、  
「それはきつとあの雌鯛が呑んだのに違ひはありません。こないだから喉に刺が立つて、物が食べられないで困つてをりますから。」と申しました。

そこですぐに雌鯛を呼んで、喉の中を探つて見ますと、なるほど大きな釣針を呑んでました。命に御覧に入れると、それが失くなつた針でした。

海の神は針を綺麗に洗はせて、命に差上げながら、  
「それではこの針をお持ち歸りになつて、お兄さまにお返しになります時は、きつと  
馬鹿な釣針

心配な釣針  
心配な釣針  
貧乏な釣針

と仰しやりながら、後向になつてお渡しなさいまし。

それから、此度お兄さまが高い所へ田をお作りになつたらあなたは低い所へお作りなさいまし。お兄さまが低い所へ田をお作りになりましたら、あなたは高い所へお作りなさいまし。さうなされば水といふ水はわたくしの自由になりますから、あなたの田へばかり水を入れて上げるやうにしますからお兄さまの田には何も賣らなくなつて必ず三年の間に貧乏になつておしまひになります。さうするとお兄さまはきつとあなたを憎らしがつて殺しにお出でになります。その時には、此の満潮の珠を出してお防ぎなさいまし。すぐ大水が湧き出して、悪い人々溺らしてしまひます。その代りお兄さまが閉口して、もう悪いことはしないから助けてくれといつて、おわびになりましたら、此の干潮の珠を出して水を引かせ、命は助けてお上げなさいまし。」  
かう言つて貧乏二つの珠をお上げ申しました。

命はそれからお兄さまの所へ入らつしつて、海の神に教はつた通りに、  
馬鹿な釣針  
心配な釣針  
貧乏な釣針

と言ひ、後向になつて釣針をお返しになりました。

それからやはり海の神の言つたやうにして田をお作りになりました。

さうすると命の田からはどん／＼お米がとれるのに、お兄さまの田へは水がちつとも来ないものですから、お兄さまは三年の間にすつかり貧乏になつておしまひになりました。

すると案の定お兄さまは命の運のいいのを憎らしがつて、たび／＼命を殺しにお出でになりました。そのたんびに命は満潮の珠を出して、大水の中へ

一針をのこらす申ひ集めて、  
「これから日の神の御子が日本へお歸りになるのだが、御子をおのせ申して行つて、歸つて来るまでに幾日かゝるか。」と一人々々に聞きました。  
鰐たちはお互ひに體の大きい小さいに應じて誰は幾日、彼は幾日と一人々々時間を計つて答へました。その中で一尋も長さのある大鰐が、  
「わたくしなら一日あれば往つてまゐります。」と言ひました。海の神は、  
「それではお前を送り申して来てくれ。途中海の中で氣を注いで危い目にお遣はせしてはならないぞ。」と厳しく言付けました。  
鰐は言つたとほりたゞ一日で往つて歸つて来ました。命は無事に日本の國にお着きになつたしるしに腰刀を解いて鰐に着けてお歸しになつたので、海の神も豊玉媛もやつと安心いたしました。



お兄さまを溺らせました。お兄さまが閉口して、もう悪いことはしないから助けてくれと仰しやると、干潮の珠を出して水をお引かせになりました。

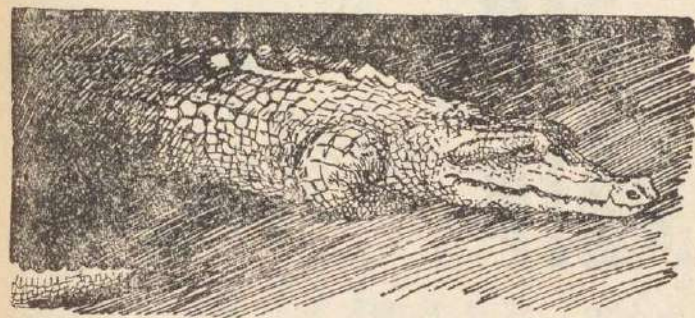
そのうち強情なお兄さまも、これではとても命には叶はないと思ひになつて、

「もう勘忍しておくれ、これから一生お前の家の番人になつて、何でもお前の言ふことを聞くから。」と言つて、地びたに頭を突いておわびをなさいました。

### 三、海の産家

さて命は日本へお歸りになつてからも、海のお宮に残して来た豊玉媛のことはお忘れになりませんでした。風が吹いて波の高い或日、豊玉媛がふいに海のお宮から出て来まして、

「わたくしは今にもお産をいたしますので、天の神さまの御子さまを海の中へお生み申しては畏れ多いと御して、はるる出てまゐりました。」と申し



七四  
上けました。  
そこで命は大きいそで、お産をする産屋を海ばたへお建てになりました。その屋根は茅の代りに鶴の羽を集めてお貴かせになりました。が、その屋根がまだ蒼けきらない中に、豊玉媛はもうお子さまがお生れになりさうになつたので、急いでお産屋へお入りになりました。た。その時媛は命に向つて、  
「お子さまを生みます時には、わたくしの姿が變るかも知れませんが、お生れになりますまでは、どうぞ此の産家の中をお覗きにならないで下さいまし。」とくり返しくり返しお頼みになりました。  
さう言はれるとなほと見ていのが人情だものですから、命は俄か

らそつと行つて取いて舞臺になりました。さうすると、めで美しいお姫さまであつた豊玉媛は、八尋もあるやうな大鱈になつて、よろ／＼御ひまはつてゐましたので、命はびつくりして逃げ出しておしまひになりました。

豊玉媛は氣味のわるい鱈の正體をとう／＼命に見られてしまつたので、恥かしくつて恥かしくつてたまらないものですから、お子さまをお生みすると、すぐもとの女の姿になつて、

「これからも始終海をわたつてお傍へまゐるつもりでしたがあんな恥かしい目をお見せになりましたから、もうこれきりお目にはかゝりません。」とかう言つて、生んだお子さまを後

にのこしたまゝ、海と陸との界をふさいで、海のお宮に歸つてしまひました。

かうしてお母さまの豊玉媛はその後とう／＼一生出て来ませんでしたが、お子さまのことは心配でならないのですから、妹の玉依媛を代りによこして育て、もらひました。それで豊玉媛は命のお覗きになつたことは、恨めしく思ひながら、やはり命が戀しくつて、いつまでも忘れることができませんでしたから、或時妹の玉依媛に言つて、

赤玉は 緒さへ光れど  
白玉の 君が敷し

七五  
といふ歌をよんでお送りになりました。  
こゝは赤い玉はそれに通じた紐まで美しく見せるほど、花やかな立派なものです。その赤玉にまさつて、滑い汚れない白玉のやうなあなたの鬘はしいお姿をわたくしは始終お慕はしいものに存じてをりますといふのです。  
命はこの歌をお聞きになつて、大層哀れにお思ひになつて  
沖つ島 鴨着く島に  
共に居し 妹は忘れじ  
世のこと／＼に。

といふ歌をおかへしになりました。これは、沖に住む鴨のやうな水鳥でもなければ、行くことのできない海の底のお宮で仲よくくらしたお妃のことは、一生がい忘れようと思つて忘れることはできないといふ深いお情をこめたお歌です。  
さて火折命はその後日向の高千穂の宮にお住ひになつて、五百八十歳まで長生をなさいました。

豊玉媛のお生みしたお子さまは、鶴の羽の芽茸ができ上がらない中にお生れになつたので、鶴芽茸茸不合命と申し上げました。この命のお子さまが、神武天皇です。

——日本神話をはり——

自由畫「友の手紙」賞  
長野縣南佐久郡野澤町 柳澤とし



童謡 野口雨情選

帆立貝

山口新庄雨虹

母さんの留守に  
お酒を飲んで  
狸々まつか

お月さま

東京松谷 富

國は四國の帆立貝  
何にが悲しうてお泣きやる  
故郷へ歸る船ちやとて  
それが悲しうて  
お泣きやる

飴屋

京都都大路健一

お月さまが 落つこちた  
とろとろ川へ  
落つこちた  
エツサホツサと  
落つこちた

にはか雨

千葉笹生 藍

トンコく 飴屋の  
お爺さん  
一錢出すから飴お呉れ  
可愛金時さんの  
飴お呉れ

狸々まつか

和歌山 江南里正孫  
おんぶ

こはれ時計

北島田信一

おんぶ

北海道 今河喜美子

せまいお爺屋の  
ボンく時計  
針は動かす  
ボンく鳴らす  
こはれかかつた  
ボンく時計

蟻

兵庫安福武夫

おんぶした おんぶした  
隣の小母さんに  
おんぶした  
どこへいった どこへいった  
遠くのお祭 見にいった

なまけ鳥

神奈川 石川榮勇

お庭で蟬が 死にました  
蟬がお葬式してやつた  
永いく行列で  
自分の穴へ引いてつた

子雀

横濱 山口米子

なまけ鳥は 夏が来ても  
黒い帽子に 黒い服  
なまけ鳥は 夏が来ても  
白いおべも買へないで  
畑でばつかり 啼いてます

日暮の鐘

水戸 黒瀬勝蔵

雨が降つて来るから子雀さん  
早くお家へお歸りよ  
お腹がすいて歸れないの  
御飯をやるから  
お歸りよ

大な鐘が ゴンく響く  
眞赤な空に

自由畫「インキ瓶」賞

下關市觀音崎町 古殿 實



自由畫「イへ」  
山梨縣上九一色小學校第一土橋春子



雀は急げ  
坊やは泣くな  
大な鐘がゴーン／＼響く

たふれた木

岩代大竹みよし  
起きたい 起きたい  
ドッコイさ  
起きてくれば無いものか  
起きたい 起きたい  
ドッコイさ

つなみ

東京志村照子  
あらあら 兄さん  
また波が  
わたしのお砂のお山まで  
ざんぶ／＼  
さらつていつてしまつてよ

自動車

お母さん びよん／＼  
お母さん びよん／＼  
お月さまへ 餅つきに  
びよん／＼

登

山梨高橋十成  
間の田圃を 飛脚の巻が  
すいっ すいっ  
急いで通つた  
ひとりで通つた  
さびしかつたら

田圃の道

東京村山厚生  
田圃の道を  
歩いて行つたら  
電信柱が ぶーん ぶーん  
風に吹かれて  
唸つてた

自動車来て とばしりを  
びちやんことかけて  
走つてく  
白い前掛けが どん／＼

納豆賣

東京立石一英  
納豆賣のをばさん  
雨の降る中  
誰も買つてくれないに  
ナアット ナアットー ナアット

雀の子

山形佐藤欣造  
日の暮れるのに 柿の木に  
雀が一羽とまつてる  
仲間の雀は歸つたが  
歸るよつほもなくなつて  
山を眺めてとまつてた

兔

燕の歸り

福鳥西形綠葉  
フロックコートの  
燕の小父さん  
山を越え、海を越え  
年來ますと お囀いたして  
歸つていつた。

鴉助太郎

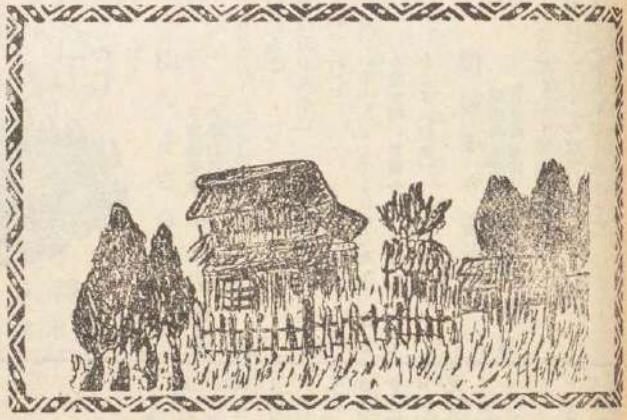
大坂潮川水燕  
鴉助太郎 つくねんほ  
明日の日和は判るかね  
雨だか風だか見えてくれ  
鴉助太郎 つくねんほ  
お日和見ようとて飛んでつた

赤子

兵庫高麗斎伊  
赤んぼが  
小さい口で吞みました  
お甘さうに  
母さんの  
お乳をくはへて吞みました

自由畫「風」

秋田縣代野小學校第六 田中三五郎





幼年詩 若山牧水選

山いちご (賞)

千葉縣東金市東千代子 小學校尋五

いちご  
山いちご  
だれのおみやに  
もつて行く

群、いそぐとしてきれいな花をとつてゐる姿が短い言葉の中にいきくと出てゐます。(牧水)

僕のまり (賞)

茨城県鹿嶋郡横瀬秋男 大寶校尋四

一人でなくした僕のまり  
なけてなくした僕のまり  
うちへかへればしかられる  
月の出るまで待つてませう

一寸ぼうし

山梨縣小淵澤小野隆英 小學校尋六

一寸ぼうしのゆめを見た  
一寸ぼうしが  
のみを取つてた

群、その蚕が君にとびつき君はびつくり眼をさましたのだらう。(牧水)

ねこねこ

北海道美深平幸雄 小學校尋四

おきよ  
小さい猫よ  
ねずみがとれた  
小さいねこよ。

群、やさしい心がやさしい言葉となつてゐる。(牧水)

そらまめ

東京市外灘の川町一二三 三谷せつ子

綴方 編輯部選

からすの子 (賞)

埼玉縣志木小學校尋四 三上政五郎

わすれもしない一年生の時であります風がふいて、ひどいのでした。まもなく風がやみましたので、とうさんと、弟と僕と三人で、しかは様の森の中へはいつて行くと、くろい小さなものがある。僕がさきにいつて見ますと、からすの子でした。かはい目をして小さな足でかあかあとないた。僕はそれをひろつてきてかごに入れて、ごはんをたべさしていく日か飼つておくと、おやが柿の木で下を見ては、かあくとないた。そうしていく日かたつてから、又しかは様の森の中へにがしてやりました。さうするとぼつと下を見ながら、いどもかあくくと下を見てそれから東の方へとんで行つてしまひました。そのからすは、それからど

おさげごめと財布 (賞)

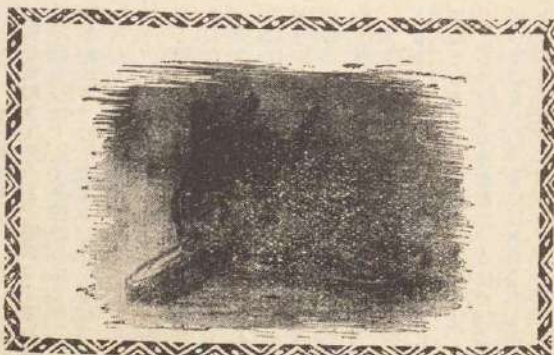
山梨縣多摩丸茂すみ子 小學校尋五

私にはおさげごめがあります。いまさしてゐるおさげごめは、東京の土屋様にもらひました。その土屋様はねえさまのおつれです。その土屋様にはもとお母さんがあつたが、甲府でお母さんがなくなつたのださうです。それから東京へ家をひつこしたといひましたが、土屋様が家をごしても甲府にゐて、そのときちやうどお寺とおやこであつたから、甲府のお寺でしんじんばかりしてゐたといひました。さうしてすこしたつと東京へかへつて、休に私のうちへ遊びに来て、財布とおさげごめをくれたのです。土屋様はなかなかはいといひました。大きいねえさまがなせといひますと、やさいなごせいせいたべられてい、ねえといひました。私はとうふやあぶらけなんか東京でたべてきたから、やさいをたべたいといつたので、私とお母さんで、ねぎやいもをおいていれました。よるになると、ごはん



自由畫「妹の帽子」

札幌區北四條西五丁目 生島茂雄



自由畫「父の靴」

長野縣上諏訪町 小澤正直

母さんが忘れておいた  
そらまめ  
めざるの中で  
みんな一本足出して  
チンチンヤゴマゴしてた。

ほたる

長野縣下高井 宮崎 敏郎  
郡平野村安代  
月夜の晩のほたるが  
月をはひかるしほたるも光る  
群、そして敏郎さんの眼も光る。(牧水)

雨

山梨縣北巨摩郡 宮崎 仁翁  
多摩小學校尋四  
ふるふる雨が  
あちらの方から  
こつちの方まで  
雨がふる  
群、ひとつひとつに筋となり、千の筋萬の筋、いちめんにアツと降てる。(牧水)

今日の波

今日の話は  
大きいなみじや  
をかからみると  
白鳥がおよぶるやうな  
うらのたんぼ  
茨城縣結城郡 五木田 宗太  
水海道校尋六  
日照がつづいて  
せんみがなくて  
裏のたんぼは  
水無したんぼ  
日照がつづいて  
水無したんぼを  
かへるがはねて  
ビョン／＼はねて  
田のくろふちの  
質のいつたまめだ

つばめ

長野縣下伊那郡 松澤 俊雄  
千代利字法全寺  
つばめか  
高い空を  
たのしさに  
とびまはつて居る

夕焼

東京市本所 島田 信一  
小學校高二  
夕焼

へいつてみんなで、たまごをかけたお茶ぐわしをだしてのみました。そのばんもとまりました。そのあしたになつて、私が學校からかへると、土屋様が車やを見にいかんけといつたので車やを見にゆきました。すこし見てかへりました。土屋様が道をまちがへて、かすえさんの家の方へゆきました。こつちだといふと、さうといつてきました。かへつてきて話をして十二時までもおきて居ました。私はねむくなつたので、だまつてねてしまひました。私の財布はかいきの財布ですが、ねえさんののはちりめんです。私のはむらさき、しろ、あかいと三色まじつてゐます。みどりととよがまじつてゐます。ちよつと見ると私の方がきれいに見えます。ねえさんの財布がよたになつてゐます。私はしまつとくからちつともよごれません。私は一べんもいびつたことがありません。私のおさけどめの方は四十錢だと土屋様がいひました。私のおさけどめを見ると、いつも土屋様のことを考へだします。

雨つゞき

愛媛縣富田 秋山 乙女  
小學校尋五

私が朝起きて見ると、雨がたくさん降つてゐました。私は學校のしたくをして行ききました。私らが習つてゐる間も、ほしやくくと雨に音をたててふつてゐました。かへる時にも降つてゐました。かへつて遊びに行つて居るときでも降つてゐました。あくる日も、そのあくる日も、たくさん雨がふつたものだから、とんだ川にはたくさん水が出てゐました。その次の日、雨が降るのに學校へ行つてみました。皆いつものやうにきてゐました。私は静江さんと一しよにあそんでゐると、静江さんが「どてがきれんちやとい(静江)」と言ひました。私はおそろしくてたまりません。學校からかへると、すぐどてへ行つて見ました。水はだいぶんへつてゐました。青年はあちこちしてゐました。かへつて前へあそびにこつてみますと、大きなふるしきの中へ、きものや木が入れてありました。私はおかしかなりました。かへつてお母さんにそのこ

とを言ひますと、お母さんは口をあけて笑ひました。私は何もすることがありませんから、又前へあそびに行きますと、前のおばさんが「はるほどがきれんきれんいふて、何もかもつんでしまつてもおかしからかん」といつて笑ひだしました。私はそれを聞くと、よけおかしくなつてきました。するとお母さんは「あつちやどてがきれたら、あのふるしきつづみをもつてにけるんぞい」と言ひました。私は「あの大きいもんがどうしてもてりやい(静江)」といつてまた笑ひました。

口げんくわ

臺灣臺南竹園 重松 晶也  
小學校尋六女

或日の夕方でした。おそんでると父が「品也も明もふろに入れ」と言はれました。私は弟と石けりをして居たのでいやだつたが、弟に「お父さんがあんなにいはれるから又あすしようや」といひました。弟は「いでもすこししようねえ姉さん」といふので、私はしがる様に「しかられるよッ」といつた時海や(車夫)が倉から

車を引つぱりだした。私はそれを見て、「先生どこ行く」と言ひました。車夫は「カンキキマスネ」といつた。私は「フン公館、宴會の」といふと、車夫がうなづいた。すると弟が「ホラ姉さん父さんいらないからしよう」といつたので、私は「いやッ」といつた。弟は私をバチンとなぐつた。私はしやくにさわつたから「こらッ」といひさま、竹きれひろつておひかけた。弟は笑ひながら湯殿の前から座敷前の庭さきへとびだした。私はなほおつかけたらえんがはにもう、もんつき羽織はかまの父が立つてゐられた。私はハツとしたがおそかつた。父は私を見ながら「まだフロにはいらんか、明もはれれッ」といはれた。叱られてしよんほり臺所にくると、母が「しかられたでせう、頭をふりみだして、女のかせほうなんかもつて」といはれた。私は「そらそうだけど、私が石けりせんといつたら、ほうや(弟)私なぐるんだも」といつた。其の時父が母に「もう行くぞ」といはれた。



いつも赤のに  
今夜の夕焼は  
へんな色して  
赤いんだなあ

大工さん

埼玉縣志木  
小學校尋四 蒔島春吉

とんかちくくくと  
大工さんは  
のみであなをほつてゐる  
今日もやります  
とんかちくくくと

父さまのおかへり

東京市外千駄ヶ  
谷第一校尋六 松原武子

ていしやばに  
ひがつくころ  
父さまがいつも  
かへつていらつしやる  
今日は外へでて  
まつてませう

流れた鈴

高知市第三  
小學校尋四 本間好子

川に流れた小さな鈴は  
ちる／＼かはい  
音たてて流れていつた

月見草

南下關市西  
向野綾子

黒い山ニ  
大キナ月ガ出ルト  
長イ線路ニ  
月見草ガニツツ咲イタ

汽車

東京本郷區駒  
込野坂町九三 和田昌三

線路を二本書いて汽關車一つ書いて  
箱をつないで車輪をつけて  
お父さんも乗せてやろ  
お母さんも乗せてやろ  
兄さんも姉さんもお乗り  
僕の汽車は急行だ

電車

大阪府浪長  
尾校尋五男 藤井伊太郎

風と一しよに  
飛んできて  
風を残して  
飛んでいく

今朝の四時

長野縣下高井  
郡平陸村安代 宮崎通郎

鶏が鳴いた  
目がさめた  
外はあかるい

母があたふたとんで行かれてから、二  
人はふるにはいり始めた。

ちよつと水道せんをひねつて見たらザ  
アツとでて、そこにしやこんでゐるた弟の  
頭へかかつた。弟はやつと水道の下から  
でてきて『どうしてそんなにするの』と  
いふので、私は『そんな所へおるのが悪  
い』とどなつた。

弟は何ともいへなくなつて『もらひ子』  
とどなつた、私は『もらひ子だつてお前  
より勝つてゐるぢやないか』といつた。

『なあんだもらひ子もらひ子』  
『なあんだもらひ子にもまける大馬鹿三  
太郎やい』

私は大てい重松といつてゐるが、事實長  
生がほんとに私の名字なのだ。私はよく  
事情は知らないがなんでも母の實家の姓  
が長生といふのだそう。それで弟と性  
がちがふんで弟はすぐ橋の下のひらひ子  
もらひ子といふのだ。

私は又もらひ子といはれて腹かたつて  
たまらず『もらひ子でもえらい者はえら  
い。お前がへつほこ役人になつてゐる頃  
別さん大臣になつてすぐお前をくびきり

かはいいい雀  
秋田縣雄川  
小學校尋四 伊藤シゲ

この間おとうさんが山の方に行つて雀  
を取つてきたが、二三日生きて居て昨日  
の朝死んでゐました。黒い目をあけて、  
とまり木に細い足をかけてゐました。私  
はかはいいくてかはいいくて、すぐそばによ  
り、すこしたつてから、おはかをこしら  
へてやりました。そのおはかといつても  
表から拾つた石を立てたのです。そして  
へいのかはりに、きのきれをそのまはり  
にまはしました。きれいな白いクローバ  
ーをさしてやりました。一郎さんにおは  
かのばんをさせて、學校にきました。が、  
一日中死んだ雀のことがおもひだされて  
さびしくつてさびしくつてたまりません  
でした。五六日たつたら、もうゐないもの  
とみきつてなんともなくなつたけれど、  
おはかをみるとやはりかなしくつて、か  
なしくつてたまりません。だけれど、し  
んだ時よりはそうかなしくはなくなりま  
した。そして今日風がふきましたら、せ  
つかくこしらへてやつたへいのかはりに

にしるやるから』  
『へん女が大臣だつて』  
『女でも大臣ぐらゐるべんさ』  
『もう口ずもうとるのはごめんよ。晶也  
髪をおあらひね』といはれた。私はふる  
ににけこむと、弟もおつてきて顔見合せ  
て苦笑をした。

俺の清書

茨城縣眞壁郡  
若柳村尋四 佐口洋一

俺の清書は甲ばかりで俺はどんなにう  
れしいか知れませんが。

俺は毎日／＼ほめられます。

時時甲の上なんどとると『洋はするぶ  
んうまいんだな』と家のおばさんにみせ  
ると『ほんとに洋はうまいんだな』といひ  
ながらのらひました。いつもをばさんが  
わらふときにはまつくわいはがでます。

そうしてほかのおばさんやきんぢよの人  
たちがくるたびみせますと『洋ちゃんは  
するぶんうまいな』と、ふところからせ  
にをふんだして五錢くれましたから、俺  
は『どうもありがたう』といひました。

した木のきれもこはれてをるだらうと思  
ひます。

剣道試合

東京小日回堂  
町小學校尋四 菅野義雄

六月二十六日に、僕の入門してゐる日  
本武道會といふ剣道をおしへる道場で仕  
合があつた。午後一時に始まるので、僕  
は早番を食へて道場へ行つた。よばれた  
人や見に来る人やで、道場はたくさん  
頭で一ぱいになつてゐた。僕は胸がどき  
どきした。一時に廿五分前になると、大  
河原君といふ道場のうちで剣道の一番上  
手な人が、御酒をもつてまはり僕らにの  
ませた。それがすむと、千葉先生の『用意  
をなさい』といふがうれいがかつた。

一番初めは地稽古二番、次は三本勝負、  
次は五人抜、その次は紅白の高點試合、  
その次は三人抜といふ順になつてゐる。

僕は三本勝負に出るのである。僕の番  
が来た。僕は敵と禮をして、お互に二三  
歩退つた。敵は『サアコイ』といつて、  
きあひをかけた。僕もまげずにきあ  
ひをかけていつた。さうしてこちらが打

時計は四時だ

菓子屋サン

長野縣下伊那郡 林 好一  
會地小學校第四

向フノ方カラ手車ヲ  
ガツタリゴツタリ引イテキタ  
マンジユウ顔ノ菓子屋サン  
甘イカホシテヤツテキタ

雨だれ

福島縣鎌田第 越中勝亥  
一小學校第四

雨だれ 小だれ  
ボツチリ  
穴一寸掘つた

スズメ

東京市外西巢鴨 岡添梅子  
時習小學校第一

ブレブレ  
キリノ木ニ  
スズメガキマシタ

いちじくの實

福岡縣若松 宮本常一  
古前校第一

裏の植木のいちじくに  
何時の間にやら實がなつた  
青い葉陰にニツツツ  
青いお顔を出して居る  
夕 燒

夕焼小焼け  
お山が焼けた  
ま黒ろになつた  
くもが出た

お月さん

茨城 秋場 藤 枝

お月さん お月さん  
わたしはお家へ歸るのよ  
わたしと一緒に歸りよ  
これからお月さん  
どこへゆくの

魚ごる爺さん

埼玉 紅草千紗子

魚とる爺さん 八十九  
エンヤラヤツと歩きます  
魚のパケツを手になさけて  
百まで生きても歩く氣かい

水牛さん

臺灣 武藤 恒子

暑い日の照る野原で  
草をたべてはねころんでゐる  
水牛さん  
ほんたうにあきれた  
意地の汚ない 水牛さん

ち込んだり、むかふが打ち込んだりして  
ゐるが、なか／＼勝負がつかないので、  
小林先生が「一本勝負にする」と仰つた  
それからちきだつた。僕は「オドー」と  
打ち込んでいつた。オドーありといふ先  
生の聲で僕の勝になつた。僕は賞状と半  
紙とお菓子とをいただいた。

さいちやん

千葉縣東金 板倉とみ  
小學校第五

うちのさいちやんは、なきつらです。  
お母さんのかけが見えなくなると、大な  
きになきます。きのふお母さんとにいさ  
んが、成東まで隣をつけて行きました。  
それをきいてさいちやんが見つけて「お  
らんもいぐだ」といつてかけてきました。  
お母さんは「だめだよ、早くかへつて  
くるからね、なくないよ」といつて行  
つてしまひました。そのうちに「とんち  
やんおゆにはいべよう」といひましたの  
で私とはいひました。私がいひかけんに  
つかつてねむらせてしまひました。私は  
これで「は」として「ねえおばあさんねむ  
つてしまへばしりしないからねえ」とい  
ひました。

小鳥のお墓

東京市外藤原 副島 榮子  
小學校第六女

「お姉様お庭へまめほんさいをさがしに  
行きますええ」お姉様と私は小さな  
スコップをかたてにもつて、お庭へまめ  
ほんさいをさがしにまゐりました。  
あつちこつちさがしても、どうしても  
みつからないので、しかたなしにかへら  
うとして、何の気なしによこを見ると、  
何か小さなものの上には、はいがたくさん  
とまつてゐるので、何かしらと思つて近  
よつて見ると、可愛い／＼小鳥が死んで  
ゐるのです。

「まあかはいさうに」と二人思はづ顔を  
見合せてしまひました。  
「お姉様お庭へまめほんさいをさがしに  
行きますええ」お姉様と私は小さな  
スコップをかたてにもつて、お庭へまめ  
ほんさいをさがしにまゐりました。  
あつちこつちさがしても、どうしても  
みつからないので、しかたなしにかへら  
うとして、何の気なしによこを見ると、  
何か小さなものの上には、はいがたくさん  
とまつてゐるので、何かしらと思つて近  
よつて見ると、可愛い／＼小鳥が死んで  
ゐるのです。

「どうして死んでしまつたのでせう」と  
私はお姉様にうかがふと、お姉様は「す  
からおちたのでせう」とおつしやいまし  
た。私はかはいさうでしかたがないので、  
その小鳥をそつとスコップの上ののせ  
てよく／＼見ると、羽は水色で足の方に  
すこし黄色い毛がはえてゐて、むねはか  
はさへなくてほねが出てゐりました。  
さつそく穴をほつて、中にふきのきれ  
いな葉をのせて、その中に小鳥を入れま  
した。

喜良さん

福岡縣若松市 宮本 常一  
古前校第一

土をかぶせるのかかはいさうでしたが  
そのままほつてをくと又はいがたかりま  
すので、土をのせて小さな墓じるしを立  
立ててやりました。  
何かきれいなはなでもさしておかうと  
思ひましたが、よいのがなかつたので、  
つつじの葉をさしてやりました。ほんと  
にかはいさうに、二三日早く私達がみつ  
けたならば、た／＼かつたかもしれませ  
んものを。

忠魂碑より

三重縣東拓殖 岡 島 勇  
小學校第六

喜良んさは三王町ではひょうばんのが  
き大将である。顔は小さいが横目のすこ  
いところはいかにもがき大将だ。こない  
だ遠所の小さい子供をむりに海につれて  
いつて、歸つてきた時は子供はびしよぬ  
れだつた。後でだんばんに行くと「おれ  
が乗るな」といつた舟に乗つたから落ちこ  
んだんだい」といつてゐる。僕はあきれ  
て歸つた。



信 通

自由畫の批評

山 本 鼎

△山田定平氏に、一年生の畫として形ななり權衡なりがないへん寫實的なものを珍しく思ひました。一年生といへば此誠につてゐる土橋小春さんのやうな畫が多いのです。私は一年生から寫生させる(對象を見ながら描く事ばかりを寫生と云はず、もつと廣く見る)のを賛成ですから、幼年者の寫實的な能力を興味を有つて見て居ます。

併しお送りの寫生畫は、少しく細か細工になつてゐます。もつと自然物の姿の方面——つまり人間の顔でいへば、にきびや、眼のふらの小じわといったやうなものを描寫するよりも其人らしい顔の趣きを感じてかいてもらいたいと思ひます。

二年になつて畫がたいへんちびこまつたやうです。もう少し大きな紙と太く濃く材料(毛筆に墨でもよく、4月の鉛筆でもよい)を與へて手近なものを書生する習慣に導きたいやうに考へます。其頃又畫を拜見してそれに就てだん／＼考を申上げます。

△「恐れ入りますが御批評の御序に御加筆下さいませ」と添へがきした畫が三枚あります。御加筆とは批評のことですか?もし畫に筆を入れてくれと申されるなら、それはいけません。子供達が自分の眼で、心で、智慧で彼の觀、感じたものを描きますからだん／＼と自體的に生長して行くことを希願する小生には一筆も加へる事は出来ません。

△小澤正直君の寫生畫物の見方はあの通でいいわけですが、少し大きな紙へ描いてはどうですか、あんな小さい紙へ書きつづるといひつづつた描寫になりたがりますからな。

△古殿君兄弟の畫では、今度では弟の實君の方が良く出来て居ます。形の感じ方もいいし、淡い色が必然に重なつて出来たトマンの深さもふつくりした味があつていいです。兄さんのも味味のない畫ですが、熱心が不足です。よく物に眼をつけて描いて下さい。

△この中には全く捨て難い作が多くあります。例へば白江さんの「泥棒」と「てんとと蟲の宴會」や西村さんの「電車切符の話」や伊藤さんの「鳩の旅」雀の親子」や志村さんの「かくれ玉」千葉さんの「無花果の御殿」など、それ／＼非常に優れた所のあるものです。白江さんの「泥棒」はこの人の無難作なしかし現し方の巧みが出てゐて、皆なが部屋の中で恐怖におそはれてゐる所の描寫などは實に素敵でした。表現のいゝ事に於てはこの人に及ぶ者は少い位です。併し此の作は童話としては題材が子供の興味の世界を少し離れ過ぎてゐる疑ひがあるやうに思はれました。

そこへ行くと同じ作者の「てんとと蟲の宴會」は童話として好個の題材であつて、この人得意の筆は十分に生かされ切つてゐませんが、兎に角いいものでした。

△西村さんの「電車切符の話」は電車切符から

新しく出た本

八八

◆青い小徑(竹久夢二氏著)昔様に親みの多い抒情詩名作選書の第四篇です。本書には四十五篇の優れた詩と二十葉の美しい繪とがあります。一番初めに「くれがた」といふ詩があり、約束もせず、知らせもなしに、鐘が鳴る、約束もせず、知らせもなしに、涙が出る、なんと云ふやさしい詩でせう。全篇が皆このやうにやさしい懐かしい詩ばかりです。秋の淋しい夕方などこの本をお讀みになるとひとりでに涙が出てまゐります(袖珍箱入、天金、定價一冊九十錢、送料五錢、東京神田南神保町尙文堂發行)

◆科學童話「さかなの庫」(熊澤麟氏著)有島武郎、鈴木三重吉、秋田雨雀、北原白秋の四氏の推薦で出た本で、著者は海のことについては深い知識を持った人で、また文の上手な人です。それだけにありふれた此の種類の本とは全く違つて、めづらしく結構な本です。いろ／＼の魚の生活を面白くなかく、童話にしてあります。裝幀も大變よくて上品です。(四六六二二〇頁、定價一圓八十錢、京橋尾張町善隆社發行)

◆兎の籠(北原白秋氏著)第一童話集「とんぼの眼玉」と共に愛讀さるべき北原氏の第二童話集です。挿繪は初山滋氏と矢部季氏の作三十六枚、(内三色版五枚あり)、裝幀は藤岡子に命命を賜ひ、中央(三色版)、兎の籠、(四六六二二〇頁、定價一圓八十錢、京橋尾張町善隆社發行)

◆夜あけ前の歌(ワシリー、エロシエニコ氏著)先日本を道はれた百日の詩人エロシエニコの童話集です。この人の童話を小供に讀ませたためよりも多くの大人の讀者を目前に讀まれたものです。ですから面白い筋物語るものでなくてはならず、その中にかくれてゐる深い意味を傳へる爲めにあるのです。何れも人間の悲しい運命のお話です。大人向きのあつさりした楽しい本です。(四六六三三六頁、定價一圓八十錢、牛込神樂町二〇二一(叢文閣發行)

◆魚の舞踏(福永漢氏著)露西亞の子供たちから「小父さん」と呼ばれて大へん親しまれてゐたタウイロフといふ人の童話を譯したものです。これは子供にとつて面白いばかりでなく、大人にとつても味深いものです。水のおかげで美しくなつた木の葉が、自分ひとりでえらくなつたやうに威張つて、水に吃ちられる話など、すべて面白い寓意に富んだ物語ばかりです。(四六六一九五頁、東京市本郷區町日本郵政社發行、定價一圓七十錢)

◆少年科學小話(廣田花柱氏著)子供の日常生活にふれる自然、太陽、地球、遊星、森林、動物、さういつたものを取扱つて面白く、かいた物語として、知らず知らずのうちに、それらの科學的知識を子供の脳裡に植つけるやうに書かれたものです。それが皆、これか

佳作の多い今月の童話

齋藤佐次郎

△今度は三月振り集つてゐるので、いゝ作が多く、それを推選していか、かなり苦しみました。それ程優れた作が多かつたのです。以前のやうな駄作は影をひそめて、いつの間にか全體の標準が高まつて來てゐます。

△中で最も目をひいたものを挙げて見ますと次の諸作です。電車切符の話(西村楠郎)文雄さんと目白(大澤輝子)不思議なおぢいさん(藤代治秀)百合の紋章(島田ゆき子)妹の星(荒井巨)誰のせい(野村太郎)編組と夏江さん(寺島西男)白地(小林芳三郎)林檎の夢、雨の話(齋藤素果)お池のほとり(黒澤旋渦)鹿のお話(生駒伴作)かくれ玉(志村照子)泥棒、てん

八九

見た人間世界の批評を面白く書いたもので、なか／＼鋭い観察がありました。猫や犬やなどから人間生活を覗いたものは澤山あるが、電車切符だけに面白く思ひました。志村さんの「かくれ玉」は婦人の作だけにやさしい、いい気分が出てゐるのに感心しました。かういふ話ばよくあると思ひますが、すらすらと無理なく書かれてゐて、その中に自からふくよかな優しみのあるのが特に目をひきました。△さて、伊藤さんの「雀の親子」と「鴉の放」ですが、私はいつもあなたの持つてゐる藝術に感心してゐます。あなたの作には解されませんが、あなたの書いたものは、婦人のもので随分無難作です。しかし、直覺的に太い線で書いて行く所にあなたの特色がよく出てゐます。これからどし／＼書いて御覧なさい。あなたはきつとすばらしく生長しそうです。しかし、「金の船」の童話としてはもう少し複雑味のある面白い題材を選んで書いて下さい

△最後に千葉さんの「無花果の御殿」ですがこれは推薦されて誌上に出たことですから讀者の批評におまかせして特に餘計な言葉をへません。強ひてこの人の難をいへば筆が手に入り過ぎて少し氣取つた所が見える位です。勝本さんの「露の願ひ」は少女の自作童話らしいたど／＼したのですが、それだけ何ともいへない愛らしいものでしたから特に掲載しました。△この外の澤山の佳作について一々批評したいのですが餘り長くなりすぎますから略します。しかし、たゞ、次の諸作だけはあまり惜しい作なので次號推薦の候補に挙げて置きます。てんととう娘の宴會(自江好郎氏作)雀の親子(伊藤温子氏作)かくれ玉(志村照子氏作)少年少女の作では、猿の約束(堀切秀夫さん作)

### 童話の選後に

#### 野口 雨情

今回は随分澤山の童話が集まりました。皆さんの御熱心を感じいたします。本號の選に漏れたぶんで次號の選へまはしましたが七八十篇もありました。川田泰江さんの「機織りつゝん」皆川登喜彦さんの「彼岸」大野藤野さんの「金の風船」の三篇には佳作の自薦の文が添はつてゐるが、長さがあつたので、いゝので、子供に響く長さがあつたので、いゝので、それは民謡と云はずに童謡と云ふべきです。童謡と民謡の違いをお尋ねの方がありましたから序にお答へ致して置くのです。

### 綴方に就ての對話

#### 選者と少年と少女と

少年。先生、こんどはいゝのがありましたか。すみぶん澤山きたでせう。選者。さうです、すみぶんきました。でもやつぱりいゝのはすくないやうです。少年。それでも、せんよりかすつとよくなつたでせうね。選者。さうですとも、此前から見ると、たいへんな進歩です。少女。それでは、どうしていゝのがないのでせうか。選者。いゝのがないといふわけではないのです。いゝのは澤山あるのですが、とびばなれていゝのがないといふことです。どうしてなか／＼みなさんはお上手ですもの。少女。あら、あんなこと仰つても、そのくせあたしなんかすみぶんなんでも出したんですけれど一度も出ませんわ、たまには佳作といふとこへ名だけ出るのよ。

よつてゐるたいへん多うでしたが、長いのでは、おれが出来るでせう。玉井注さん、小澤ホツキ、鬼頭信太郎さんのお日様、小澤登子さんの「石かけ」久野野花さんの「星様」「郭公」宮崎金三郎さんの「からすの母さん」川岸柳生さんの「家治屋」芝嘉吉さんの「一人ぼつち」木谷末次郎さんの「夏の朝」伊藤温子さんの「百日紅」大塚大助さんの「皆で渡る」二瓶けい子さんの「不思議」勝本俊子さんの「木の葉の舟」夕陽丘登草さんの「夕日」村松實彦さんの「なぎさ」どれも特色のあるいい作でした。それに、北澤ふじ子さんの「約束」「坂道」は言葉の調子がほんたうによく整つてゐる珍らしい作でしたが、内容が童話と云ふより民謡の方に近かつたため掲載を見合せました。いつたい、童話と民謡とはともとは同じやうなものです。たゞ童話の方は無邪氣な子供性がゆたかに含まれてゐるもの、民謡の方は大人の情緒が含まれてゐるもの、それだけの違ひがありません。童話の作れる人には、無論、民謡が作れます。民謡の作れる人なら童話も作れる筈です。それから一つ云ひますが、童話は子供にも大人にも解りやすいものでなければいけません。民謡の方は大人にだけ解つて子供には解らなくとも

らの子供になくてならぬ科學的知識です。面白いばかりでなく、有益なばかりでなく、面白くて有益な本です。四六列二三七頁、東京市「田區小川町敬文館發行、定價一圓三十錢」◆花物語——第三巻——(吉屋信子著)吉屋信子さんの「花物語」といへば、少女たちの間で誰知らぬ者もいざど有名なものになつてゐます。この高では、釣鐘草、紫牡丹、秋海棠、アカシヤ、櫻、日除の花、菫撫子などのいとしい花によせて、返らぬ少女の日のなつかしい思ひ出を語つてゐます。織細流麗な筆は夢みちな少女の心をとらふるに充分でせう。菊半葉二六〇頁、東京市麹町區本町二〇〇落陽堂發行、定價一圓三十錢)◆童話掲載外佳作 馬鹿三(岩見清三) 晋仙人(啓ちやんと故郷(近江谷谷代) 柳田邦三(大塚大助) はいとこ(佐々木高明)ある鯉の話(羽賀泰三) 年の暮れさわき(藤井秀雄) 乾潮菊(坂田露香) すゝめ(江口紅時) 一行(君島久美子) 仔犬と仔猫(鈴木明枝) 蕪葉の國で(石合清水) 智慧の泉(岡添信次郎) 花子とお希さん(南無次郎) 三郎の鯛智(牧野傳) 金六爺と婢と牛(新谷義晴) 二つの失敗(島田信一) 蟹と狐(赤井金吉) 流れ豆腐(寺岡賢一) あした(平塚美奈吉) 雲の光るわけ(北島昌司) 母鳥の死(佐藤秋水) 十年の辛棒(坪井田夫) 長い話(白石秋月) 原し密蜂(井上八郎) 前世物語(鈴木一七) 七軒の村(金子一) 白雲物語(風林正) 山中の一軒家(井上朝馬) 白い小鳥(等





# 懸賞創作募集

自由畫 少年少女の創作  
 山本 鼎先生選  
 若山 牧水先生選  
 編輯部選

〔注意〕 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君の好きなものを諸君の好きなふうにならば、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおとさないようにしてください。用紙は自由畫はなるだけ用紙に、幼年詩や綴方はなるだけ原稿用紙(または半紙)にかいてください。よく出来た方には「金の船」特製の賞品を差上げます。次號起は九月二十八日、發換は十二月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地「金の船」編輯所。

## ◆一般讀者の創作◆

齋藤 佐次郎先生選  
 野口 雨情先生選

〔注意〕 童話は二十字詰二百行以内、童謡は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として差上げます。詳細な募集内容は幼年少女の創作と同じです。

森 林太郎先生  
 鈴木三重吉先生  
 松村 武雄先生  
 馬淵 冷佑先生

同撰

## 全部完成

現代童話文學界の泰斗たる上記の四大家が三年このかた異常の苦心を重ねられた本叢書はこの九月を以てよく完成を告げました。本書成りて我國の童話の傳説、神話は始めて兒童のものとして完全に系統立てられました。本書の内容用語文章並びに裝畫等を一度でも御覧になつた方は本書が現在所者間に教科書以上の兒童讀物として推獎せられ居る所以がお解りになることと思ひます。

# 標準日本お伽文庫 全六卷

第一卷 日本童話 上卷 六版

第三卷 日本傳説 上卷 六版

第五卷 日本神話 上卷 再版

第二卷 日本童話 下卷 六版

第四卷 日本傳説 下卷 四版

第六卷 日本神話 下卷 新刊

橋太郎、花咲翁、徳賢、舌切雀、カチノ山、附録解説  
 コブ取り、鼠ノ嫁入り、海月ノ使、蒲ノ草紙、文福茶釜、附録解説

浦島太郎、一寸法師、猿轎山、羽衣、金太郎、松山鏡、附録解説  
 玉取、山椒太夫、田原志太、物臭太郎、羅生門、牛若、附録解説

世界の始め、黄泉の國、天岩戸、八岐大蛇、白兔、附録解説  
 雄の使、國譲、高千穂姫、人の命、海幸彦と山幸彦、附録解説

口繪 木版原色版  
 挿繪 見開數十入  
 定價 一巻圓  
 冊八拾錢  
 郵稅 各冊八錢

發行所 東京市神田區區田路一丁目二五番 培風館

# 將にシズー來る

諸君の爲代理部の開設

ソリオキアヴ      ソリドシマ

□好評噴々たる



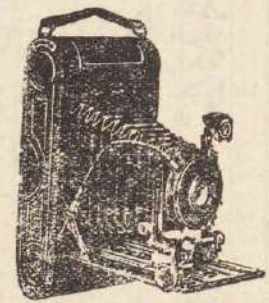
定價表  
CBA  
號號號  
二十九圓五  
二十圓五  
二十一圓三  
其他五十四圓

□賞讚の的となれる



定價表  
參貳壹  
號號號  
二十九圓五  
二十圓五  
二十一圓三  
其他七十五圓

□素人向のきカメラ



定價表  
十二圓  
十八圓  
廿二圓  
廿六圓  
三十二圓  
三十三圓  
五十三圓  
七十五圓

御問合せは必ず往復葉書か返信料添の事。御注文は住所を分りよくわしく書く事。御代金は總て前金の事、剩餘の節は返金す。拂込みは成るべく振替口座に拂込むこと。

キンノツノ社代理部

電話九段貳千七百五十貳番  
振替口座東京參〇五七貳番

條信の部理代社本は速迅と實誠

(三の付後)金

行刊宛册一月毎は(册二十全)庫文子と母

# 森の祈り

▽沖野岩三郎 先生著 (母と子文庫 第二篇)

最新刊 四六版二六〇頁表紙口繪麗美 定價金壹圓五拾錢送料金八錢

最新刊 四六版二百餘頁表紙口繪麗美 定價金壹圓參拾錢送料金八錢

この長篇物語をあまねく百萬の家庭に推薦す

# 黄金の星

▽福田正夫 先生著 (母と子文庫 第三篇)

鈴木善太郎先生著 第一篇

# たんぼぼの家

忽再版 定價金四圓三十錢 送料金八錢

たまらなく心の美しい千勢子といふ少女が、その持つて生れた純美の行爲で幾多の人々を光明へ導くといふ長篇物語。

茅野稚子先生著 第四篇

# 日の出るまで

近刊 定價金圓三十錢 送料金八錢

「母と子文庫」全十二冊の内容解説はお申込になれば進呈致します。

東京市小石川區 創文社 電話 振替 東京 四三三 八五二 番

(二の付後)金



美優てしに尙高  
るなに爲てく白面  
伽おい笑可繪いし美

ヨナ子日  
シカ本の  
シカ本の

□ 來 出 號 月 十 □

□ 幼 年 幼 女 向 教 育 的 繪 雜 誌 □

月 夜 に 兎 さ ん の ダ ン ス  
ロ ビ ン ソ ン ・ ク ル ー ソ ー の 話

猫 の 町 猫 の オ マ ハ リ さ ん  
ク ロ サ ン ト ペ ス の 旅 行

文 子 さ ん と 可 愛 い ら しい お 人 形

汽 車 あ ぶ な い あ ぶ な い

お 人 形 の モ デ ル サ ン

コ ン コ ン 狐 の ア ヅ ケ モ ノ

□ 賣 切 れ ぬ 内 早 く お 買 ひ な さい □

の 後 山 六 爺 さん  
やま ぢい

沖 野 岩 三 郎

六

婆アさんが悲しいやうなうれしいやうな聲を立てたので、みんながびつくりして駆け寄って見ますと、狼の奥様が、丁度可愛い可愛い赤ちやんを産んで、ウーウーと啼つてゐる所でした。

「まあ、元の大將軍様に、赤ちやんがお出来になりましたか。若殿様でございますか、お姫様でございますか。」と云つて、山六爺さんは土の上に坐つて拜む眞似を致しました。

「若殿様でございます。」と云つたのは、動物學の大家筑前守右衛門でした。すると一同は聲を揃へて、

「元の總大將軍様お目出度うございます。」と云つて拜む眞似をしますと、二疋の狼は白い牙を見せながら、安心したといふやうに、ウーウーと啼りました。

其の時、人間の事を毎日教へて居る今の總大將軍が、こんな事を申しました。  
「さあ、皆さん、元の總大將軍が、若殿様をお産みなされたので、そのお祝ひに明日から十日間に、何

向 女 幼 は シ ョ カ ナ 向 年 幼 は 供 子 の 本 日

…… 錢 拾 五 圓 壹 共 料 送 冊 六 分 年 半 ・ 厘 五 料 送 錢 五 拾 貳 部 壹 價 定 ……

行 發 社 ノ ツ ノ ン キ 段 九 京 東  
番 二 七 五 〇 三 京 東 號 番 座 口 替 振

でもいから一つの發明をして下さい。そして其の發明の一等賞を貰つた人には、毎日一時間づつお仕事を餘計にさせて上げる事にしませう。」

總大將がかう言ひますと、みんな大喜びで、めいめい自分の家へ歸りました。そして十日目に千六百人はみんな一つづつ、自分の一所懸命になつて考へた發明品を、ウーワン館へ持つて來ました。其の審判官の頭は工學の大家、加賀の守が右衛門でした。

發明品の中で一番長いものは、ろ玉の發明した天へ登るのだといふ「雲梯」といふものでした。實に旨く考へたもので、梯子を一段一段登つて行くだけ自然に長く伸びて行く仕掛であつたが、さて、此の天まで届く梯子を、どこへ立掛けるかといふ疑問が出た時、それは落第致しました。

一番大きい發明品は、周防の守が右衛門の作つた風袋でした。それは風の吹く時、その袋の口を少し開けて置くと、吹いて來た風がみんなその中に吸込まれてしまつて、どんなにても大きく膨れるのでした。で、その使ひ途を訊くと、夏の暑い時は、風をそれに入れて置いて少うしづつ朝から晩まで出すやうにすれば、村中の人が暑さ知らずに暮す事が出來、冬は村の入口へその袋を据付けて置けば、吹いて來る冷い風が、みんなその中に入つてしまつて、村へは冬の季候が來ないといふのでした。

これは便利な品だといつて、みんな感心しましたが、さて、その袋に一杯風を入れると、それは此の山六村の三倍も五倍もの當になるので、それを何所へ置くかといふ事が問題になつて、これも落第になりました。

一番小さいものは、瓜腹鏡といふ眼鏡でした。それで見ると、人間の瓜の形には、小さい方が何百、身體の眼を近づけると何分何分も入つてゐるからといふ事が、すつかり解るのでした。それは大變衛生の爲に善い發明品だと云つて、みんなが買ひました。しかしその眼鏡を一時間も使つて居ると、近視眼になるといふので、これも落第に決りました。

空を飛ぶ機械だと云つて、お船のやうな形に貼つた大きな紙傘だとか、何所へでも持つて行ける船だとか云ふ、合羽で造つて折疊みの出來るボートなどが澤山ありました。中には人を笑はせる機械だと云つて、丸い玉を兩方の脇腹へ當てて置いて、機械を動かすと、その玉が兩脇を標ぐるので大笑ひ中笑ひ小笑ひ、泣き笑ひなど、自由自在に笑ひ分けられる器械やら、地獄の釜の音を聴く機械だの、天國の音樂の音響機だのといふ馬鹿馬鹿しいものもありましたが、無論それらはみんな落第でした。

最後に一つ残されたのは竹で作つた細長い一本の笛でした。それは、「五音の笛」といふ名で、五つの穴を押へてゐて、其の一番上の穴を明けて吹くと、パーと鳴り、その次がピー、その次がプー、その次がペー、その次がポーと鳴るので一番簡単に出來てゐました。

加賀の守が右衛門が、その用ひ方の効能を尋ねますと、發明人の紀伊の守が右衛門が、「それは動物を呼ぶ笛で、パーと鳴らしますと、兎と猫、ピーと吹きますと狼が集つて來ます。プーは鹿、ペーは猪、ポーは狼といふ順序になつてゐます。どうぞ一度御試験なすつて下さいまし。」と申しました。

それは重寶な品だといふので、早速それを山六爺さんに渡しますと、爺さんは其の笛をもつて後の小高い所に走り登つて、パーと吹きますと、何所からともなく昨日の兎と猫とが、ぞろぞろと出て來

ました。

「来た来た！ さア次はビーですよ。」と婆アさんが言ったので、ビーと鳴らしますと、二百疋のお猿がみんな真赤な顔をして、ざあざあ、ばさばさと木の枝から降りて来ました。

「今度はビーですよ。」と婆アさんが言った時、爺さんは周章で、ブ、べ、ポーと續けて二緒に吹いてしまつたもんですから、さア大變です。二百の鹿は大きな角を振立てながら、二百の猪は白い牙を鳴らしながら、百五十の狼は尻尾を足の間に引込みながら、三方から駆け出して来ましたので、爺さんもびつくりして、ひやアア！ と奇妙な聲で叫びながら、山六學校の中へ逃げ込みました。すると千六百人の人間も、みんな吾一に逃げ込みました。

「ふん、これは不思議な笛だ。しかしかうして集つて来た獸を、みんな元の棲所へ歸らすには、どうすればよいか」と加賀の守が右衛門は、山六學校の黒板の前に逃げ上つて、ぶるぶる顔へながら問ひました。

「それは五つの穴をみんな明けツ放したま、お吹き下さい。」と紀伊の守が言ったので、早速山六爺さんは其の通りにして吹きますと、それはそれは何とも言へない面白い節で、ヒーヒー、ヒーヒヨロ、ヒーヒヨロ……と鳴りました。

その笛の音を聞きますと、猿も鹿も兔も猪も狼もみんな温順しく頭を下げて、静々と山の中に歸つて行くのでした。

「これは事一等實です。」と加賀の守が申し進みますと、みんな一齊に、

働いて居て、  
さア、かうなると其の次の日から、みんながチーンの時計が鳴つて、ガーンの時計まで一所懸命に

「時間だぞ、さアこれから學問だ！」といつて、みんなが山六學校へ入つて行く時、紀伊の守は發明のご褒美として、一時間だけ餘計に仕事をするのです。そして學問も一時間だけ多く習ふやうになりました。するとみんなが、

「私も、あんなに一時間でも餘計に働きたい、勉強したい。」と云つて羨ましがりました。

さて、此の笛吹番を誰にしようかといふ事に就いて、みんなて種々と相談した末、それはその笛を發明した、紀伊の守が宜いだらうといふ事になつて、紀伊の守が其の笛を預る事に決りました。所が其の翌る日の朝、紀伊の守が裏の小山に登つて、一番お終ひの、「ポー」を吹いてみますと、北の山から何百疋とも知れない狼は、みんな一疋づつ可愛い可愛い赤ちやんを伴れて出て来ました。

「来て御覽なさい、来て御覽なさい。何と可愛い若殿様です、何と美しくいお姫様です。」

紀伊の守が大聲でかう云ひましたので、丁度今御飯を食べようとしてゐたみんなは、お茶碗もお箸も投げて置いて裏の小山に走つて行きました。すると可愛い赤ちやん達が、タンクン、と啼きながら人間の居る所へ、よろよろと登つて来ました。「まあ可愛い。」と云つて、みんな吾一にその仔を抱き上げました。

婆アさんは家の若殿様を抱いて、頬摺りしながら其所へ来ました。同じ若殿様やお姫様を、多勢

の人が抱いてゐますので、大事の大事の若様を野山生れの山狼やまろうと間違へられては大變だと云ふので、さつそく紅い絹の布片で首玉を作つて、それへ小い銀の鈴を縛りつけました。でもまだ安心出来ない

ので、  
「若さん、今日から此の赤ちやんだけを若殿様と呼ぶ事にして、山の狼の子供達は、若様だのお姫様だのと言はないで下さい。元の大將軍様の若殿様に對して失禮でございますから……」と申しました。すると、山六爺さんは、

「そんな筈はない。狼の仔はみんな狼だ。山で産れようが、家の中で産れようが、みんな若殿様でありお姫様であるんである。そんな依姑いこひいきをしてはいけません！」と叱るやうに言ひました。

其時、伯耆守はくしよは右衛門が、爺さんと婆アさんの間へ入つて、

「ではかうませう。今朝みんなて相談して此の狼に二一名前をつけませう。そして其の名前を呼ぶ事にすれば、若様もお姫様もありませんから。」と申しました。

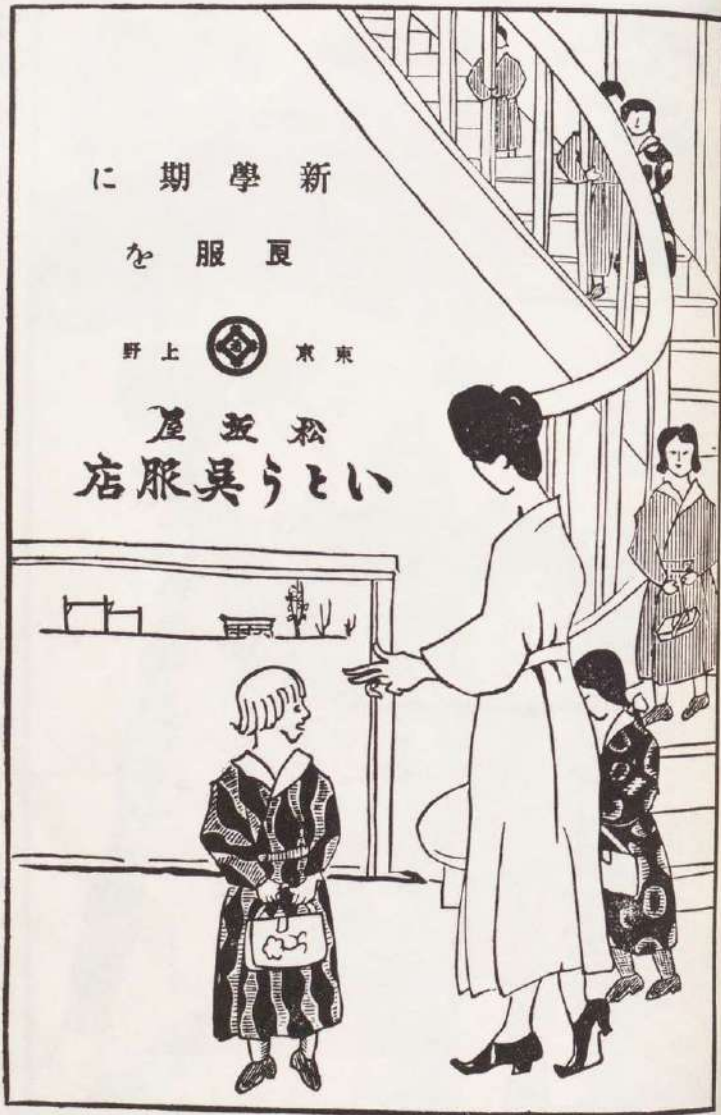
爺さんも婆アさんも、「それは宜い、さうしよう。」と云ひました。(つゞく)

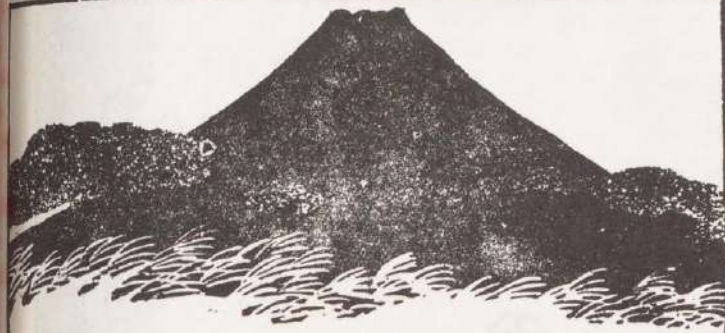
新學期に

夏服を

東京 野上

松坂屋  
いとう呉服店





大正八年十月十六日  
大正十年九月六日印刷  
大正十年十月一日發行  
第三卷 第十號

東京 キンノツノ社 發行

# 秋あきになりました.....

.....秋あきの御入用品揃そろひの三越呉服店  
秋あきの晝間ひるまは、野のに出でて盛さかんに運う動うご、身み体たを丈さか夫まに、夜よは盛さかんに  
勉べん強きやうして智ち識しを磨こかねばなりま  
せん、運うご動うご具ぐも學がく校がう用よう品ひんも書しよ籍せき  
も悉ことごとく四よ階かいに取と揃そろへてあります

東京  三越呉服店

◆定休日◆九月廿六日◆十月は十日◆廿五日◆